

昭和四十一年四月二十日
昭和四十一年十二月二十五日
第一卷第一号
発行

学校体育研究

— 保健・体育の学習指導 —

特

集

全 国 学 校 体 育 研 究 大 会

◇ 全国保健体育優良校表彰

表 彰 校 一 覧

◇ 第五回 全国学校体育研究大会

小 学 校 の 部

中 学 校 の 部

高 等 学 校 の 部

財 団 法 人

日 本 学 校 体 育 研 究 連 合 会

Ⅱの1

日本学校体育研究連合会推薦

楽しく泳ぎ
ましょう！

特長

- ナイロンです：ニチレナイロンの特殊加工糸を使用 びったり体
にあう、泳ぎやすいことも満点、そして丈夫です
- デザインは：小・中学生用、高校生用それぞれ新しくデザインし
た六五体型、軽く、肌ざわりがよい、水きれも早く、すぐ乾きます
- 滑やすい：えりくりのカットにくふうをしたのでとても滑やすく
サイズも豊富です
- 色：小・中学生、高校生にピッタリの色を選びました

 全国中学校体育連盟推薦

ニチレ スクール水着・パンツ 日本レイヨン

☆ 繁栄は良品よりうまれる。

☆ 製品に魂をうちこめ。

大阪・日本レイヨン株式会社・東京

目 次.....No. Ⅱ ～ Ⅲ

○ 全国保健体育優良校表彰

祝 辞.....文部大臣・有 田 喜 一 (7)

会 長 あ い さ つ野 沢 要 助 (6)

全国保健体育優良校表彰名簿..... (8)

表 彰 を 受 け て長谷川 信 也 (10)

○ 全国学校体育研究大会

◇ 小 学 校 の 部

器 械 運 動 (16) 陸 上 部 会 (20)

ボ ー ル 運 動 (23) リ ズ ム 運 動 (26)

◇ 中 学 校 の 部

器 械 運 動 (31) 陸 上 競 技 (34) 柔 道 (49)

バスケットボール (37) バ レ ー ボ ー ル (41) ダ ン ス (46)

サ ッ カ ー (44)

◇ 高等学校の部

器 械 運 動 (53) 陸 上 競 技 (54)

剣 道 (57) サ ッ カ ー (56)

◇ 総 評.....井 上 一 男 (58)

○ 全国学校体育研究岐阜大会記.....小 碓 松次郎 (11)

連 合 ニ ュ ー ス (59)

昭和41年 評 議 員 会

第5回 全国学校体育研究大会反省会開く

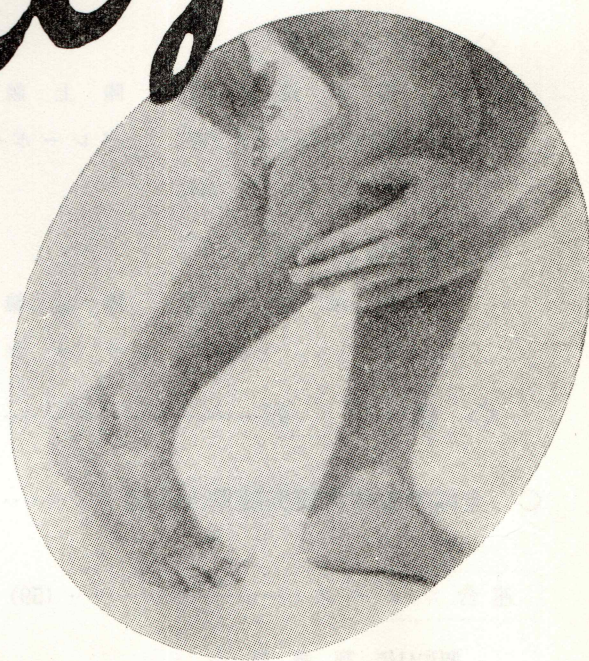
Kowa 興和新薬株式会社

スポーツマッサーミン薬 プレザン コーワ軟膏



スポーツ前後の筋肉疲労
筋肉痛、ねんざ、うちみ、
肩こり、腰痛、神経痛、
リュウマチ性疾患、

Plezan



スポーツの前に 使ってください。

マッサージしてしばらくすると筋肉内に深く浸透し、効き始めます。従ってスポーツ前のご使用は特に効果的です。また筋肉に浸透したプレザンは、硬くなっている筋肉を軟らかくして、身体を柔軟にしますから、うちみやねんざなどがおこりにくなります。プレザンには、弊社の開発した組織膨化能増進剤MDSが配合されています。

昭和41年度 全国保健体育優良校表彰式

○ 会 長 あ い さ つ

○ 祝 辞 文 部 大 臣

○ 優 良 校 表 彰 一 覧

○ 表 彰 を 受 け て

主 催 日本学校体育研究連合会

後 援 文 部 省



会 長 あ い さ つ

日本学校体育研究連合会

理 事 長 野 沢 要 助

本日は栗本副会長が参上して、親しく皆様にご挨拶を申しあげる予定でありましたが、やむを得ざる事情のため、参上することができなくなりましたので、私がかわってご挨拶を申し上げます。

このたび第5回の研究発表大会を文部省、岐阜県教育委員会、岐阜市教育委員会ならびに岐阜県学校体育研究会の関係各位のご協力によって開催いたしましたところ、全国各地から多数の会員のご参加をいただき、ここにかくも盛大に開会することができますことは主催者として喜びに堪えません。

さて、戦後20年の学校体育の発展過程をふり返ってみますとき、その移り変りのはげしいことに驚くとともに、その進むべき方向性と指標とはまことに不安定であったように考えられます。

また、最近文部省から発表されました教育白書によりますと現在の日本の青少年の健康と体力とはまことに憂慮すべきものがあるように思われます。

近代科学の目覚しい発達をした科学時代に、また生活の複雑化した近代生活において、学校教育における体育科の果す役割りをどのように考え、どのように進めるかは、現時点において十分に検討を加え、安定した方向性と指標とを確立しなければならぬ大切な時期に到達していると思います。

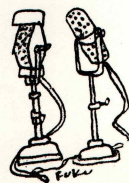
このときにあたり、岐阜県学校教育の関係各位

におかれては、これからの視点に立って、これからの学校体育の新しい角度・指標から指導の具体的な諸問題について研究討議を進め、その結果を発表されることになったのであります。

ご参会の会員の皆様におかれましては、現下の学校体育のもつ責務と使命とを深く認識され、本研究大会において、これらの問題を十分に協議検討されて、これからの学校体育指導の進むべき安定した方向性と指標とを見出し、確立されるならば、ひじょに幸せであります。

なお、本年の大会は全体会議は本日で終了し、明日は各分科会で研究討議を重ね、それぞれにおいて閉会することになっております。この大会の成果については、本会の機関誌であります「学校体育研究」に掲載して報告いたすことになっておりますからご了承下さい。

終りに本大会を開催するにあたり、長い間ご苦労を賜りました岐阜県の関係の皆様に対し、心から感謝とお礼とを申し上げますとともに本大会が真に実りのある大会となりますよう皆様のご協力を期待して私のあいさつといたします。



祝

辞

文 部 大 臣

有 田 喜 一

本日ここに第16回全国保健体育優良校表彰式が挙行されるにあたり、ひとことお祝いのことばを申し述べます。

日本学校体育研究連合会は昭和26年以来毎年保健体育優良校の表彰を行ない、学校における保健体育の振興と、児童生徒の健康と、体力の向上に大きな寄与をしてこられました。本年も、ここに第16回表彰式を挙行されるはこびとなりましたことは、まことに慶賀に堪えません。

心身ともに健全な青少年の育成をはかることは、今日もっとも重要な課題の一つとなっております。政府におきましては過般来、体力づくり国民会議を中核として、国民の健康体力増進に関する諸施策、および国民運動の推進につとめておりますが文部省といたしましてもこの趣旨に沿って、成長期にある児童生徒の健康と体力の向上をはかり、その人間形成にも資するために、学校における保健体育の内容の改善充実体育施設の整備等について、今後いっそうの努力を払っていきたいと考えております。

本日受賞された各学校は、いずれも熱心な研究態度をもって体育の指導運営に力を注ぎ、りっぱな実績をあげられたのでありまして、その成果は全国の学校体育の健全な発展のためによい指標となるものと思います。

本日の御栄誉を心からお祝いいたしますとともに、各位の日ごろの御努力に対して深く敬意を表します。どうか、これからもますます精進をつづけられ、学校保健体育の発展と、国民の健康と、体力の向上のために寄与されるよう希望してお祝いのことばといたします。

昭和41年11月17日

昭和 41 年 度

全国保健体育優良校表彰名簿

県 名	学 校 名	学 校 長 名
1 福 島 県	郡山市立芳賀小学校	渡 辺 太 郎
2 〃	会津若松市立第四中学校	佐久間 誉 市
3 埼 玉 県	南埼玉郡久喜町立江面第二小学校	山 田 敏 雄
4 〃	北足立郡鳩ヶ谷中学校	宮 野 弘 一
5 〃	南埼玉郡久喜町立久喜南中学校	石 井 正 信
6 群 馬 県	館林市立第二小学校	永 井 喜平治
7 〃	吾妻郡中之条町立第一中学校	深 井 明
8 千 葉 県	佐原市立北佐原小学校	巻 島 清
9 〃	印旛郡印西町立印西中学校	密 島 和 一
10 〃	県立銚子商業高等学校	猪 野 弥
11 神 奈 川 県	大和市立草柳小学校	和 田 尚 敏
12 東 京 都	武蔵野市立境北小学校	遠 藤 泰 三
13 〃	中野区立中野富士見中学校	長谷川 信 也
14 〃	都立上野高等学校	矢 谷 芳 雄
15 山 梨 県	東八代郡石和町立石和南小学校	岩 間 邦 男
16 〃	山梨大学教育学部付属中学校	伊 東 元 好
17 石 川 県	金沢市立森本小学校	中 条 米 吉
18 〃	羽咋市立羽咋中学校	松 栄 清 秀
19 福 井 県	坂井郡金津小学校	越 石 寛 人
20 〃	武生市武生第一中学校	牧 野 源 義
21 愛 知 県	渥美郡田原町立田原中部小学校	佐 藤 剛
22 〃	小牧市立味岡中学校	栗 木 一 男
23 〃	県立岡崎北高等学校	天 野 義 静
24 三 重 県	尾鷲市立賀田小学校	畑 中 久邇雄
25 京 都 府	京都市立蜂ヶ岡中学校	松 本 昇
26 〃	天田郡三和町立三和中学校	高 田 三 郎

27	京 都 府	府立桂高等学校	小 林 芳 夫
28	奈 良 県	橿原市立金橋小学校	弓 場 豊
29	大 阪 府	池田市立秦野小学校	竹 林 富 一
30	〃	大阪市立平野中学校	西 岡 吉 朝
31	〃	府立成城工業高等学校	岩 田 林 光
32	和 歌 山 県	伊都郡高野町立高野山小学校	金 井 恒 好
33	〃	県立笠田高等学校	山 本 佐 藏
34	兵 庫 県	小野市立来住小学校	藤 井 清 次
35	〃	豊岡市立豊岡北中学校	橋 本 勇
36	〃	明石市立明石商業高等学校	浜 田 文 男
37	鳥 取 県	気高郡気高町立瑞穂小学校	小 林 甚 市
38	〃	倉吉市立河北中学校	山 榊 一 郎
39	島 根 県	簸川郡湖陵村立西小学校	小 村 正
40	〃	出雲市立第二中学校	山 本 哲 雄
41	広 島 県	広島市立段原小学校	吉 崎 正 行
42	山 口 県	厚狭郡楠町立般木小学校	岡 部 翠
43	〃	熊毛郡上関町立白井田小・中学校	柏 木 順 一
44	香 川 県	三豊郡詫間町立大浜小学校	藤 田 虎 彦
45	大 分 県	佐伯市立下堅田小学校	高 司 遙
46	〃	西国東郡香々地町立三重小学校	三 角 政 美
47	〃	大分市立坂ノ市中学校	野 田 康 男
48	佐 賀 県	佐賀市立嘉瀬小学校	山 下 峰 次
49	〃	西松浦郡西有田町立西有田中学校	館 林 重 夫
50	長 崎 県	北高来郡小長井村立小長井小学校	才 木 敏 雄
51	〃	北松浦郡世知原町立世知原中学校	長 田 安 孝
52	〃	県立長崎西高等学校	宮 本 正 之
53	熊 本 県	菊池市立花房小学校	前 田 収
54	宮 崎 県	都城市立沖水小学校	臼 井 正 夫
55	〃	南那珂郡南郷町立南郷中学校	原 武 雄
56	〃	県立富島高等学校	藤 本 澄 夫

表彰を受けて

東京都中野区立富士見中学校長

長谷川 信也

「保健体育優良校」として賞められてみると、鍛練を重ねて一汗かいたあとの和やかな爽快感が膚をかすめて行くようである。

過去5年間、保健活動と体育学習がよく調和して教育効果をあげたことに対しての表彰のようである。

この学校に足を踏み入れて、一番さきに直感することは、グラウンドの狭いことであろう。私も2年前当校に赴任した時、運動量が制約されるような環境をみて、成長期の中学生の健康管理上たいへん悪い結果になることを憂えたものである。

空間を立体的に利用して運動量を多くするとしたら、金にかかるが屋上を回遊式につないで、シャーレン形式にし、無柱でグラウンドにすれば足りるであろう。

発育段階に必要な運動の質と量を合理的に与えることができれば、円背などの不均衡な体はなくなるはずである。

不均衡な体の生徒を一人でも少なくしたいための不断の努力が認められたのだから、これからも機材を活用し、狭いグラウンドを効果的に利用するくふうをして「からだ作り」に邁進したいと念じている。

岐阜の会場は、国体を契機に造営された由、新しい体育館はみごとであった。

私の一番感心したのは、集会者が体育館をたいせつにしていたことである。

ビニール塗料の床に、お茶呑み場の湯がこぼれるとすぐに参会者が拭う。当然のことのようで仲

々できない業である。体育の仲間は体と共に心も繊細に活動していることを知らせてくれてうれしかった。

雨のしずくがたれないための袋、裸足で踏める床を汚さないための靴袋など、細かい配慮に好感がもてた。

協議内容は全くの素人であるが、あのようなムードの中で、「からだ作り」に生命をかけた方たちの集会である。質のよい実り高い協議会であったとみてとった。

参会者も、さすがに体育で鍛えたものの集り、ずっしり重量感にあふれて誠に頼もしい限りである。

なお、年中行事とはいえ、全国的視野での優良校の発見にたずさわっておられる方々の「からだ作りの教育」への熱意に対して深く感謝し敬意を表したい。

シムレスボール



タチカラ株式会社

全国学校体育研究岐阜大会記

○ 宿 舎 風 景 (大会前日)

野沢理事長、鈴木事務局長とともに、われわれ連合会本部一行は新幹線羽島駅に下車、地元担当者のご案内で、大会宿舎にあてられた長良川畔の「高間ホテル」に着いたのは、宵闇せまる夕暮れであった。宿舎は国体のとき東京都選手団が宿泊したという近代様式をはこる6階建て、その正面玄関に「全国学校体育研究大会宿舎」と明記した立看板が先ず印象的であった。

すでに玄関ロビーの受付では、地元関係者が宿舎割当表をバックにして、訪れる大会参加者の迎え入れに大忙だった。われわれ一行もようやく3階の小宴会場を指定されたが、休憩の暇もなく、次々と来宿する講師団を迎えたり、明日からの大会運営について、現地との連絡や打合せを重ねた。

かくてあわただしい雰囲気の中で夕食をとり、さらに野沢理事長を中心に各自の分担内容の再検討をするなど、開会準備に万全を期し、ようやく寝に就いた頃はだいぶ夜も更けていた。

開 会 式

期日 昭和41年11月17日

気象庁の予報どおり大会第1日の朝は冷たい雨音で明けた。

全体会場にあてられた岐阜北高校の広大な体育館は整然と準備され、大会名を大書した正面の横額と演壇背面の日の丸がひととき会場をひきしめていた。やがて降りそそぐ雨もいとわず、続々と参集する全国各地の会員と晴れの表彰をうける優良校の代表者で、流石数千名を収容するという会場は埋められ、開会の頃には熱気をおびた人いきで寒さを忘れさせた。

定刻をややおくれで演壇を仕切るとんちょうが音もなく引きあげられ、同時に司会者の緊張した声で開会が宣せられた。

壇上向って右側には岐阜県知事や岐阜市長はじめ地元来賓と主催側野沢会長代理、西村文部省体育課長と本部役員、左側には奈良女子大浅井教授、東京教育大浅川教授他多数の講師団が居なら

び、先ず大会準備委員長高橋氏の準備経過と運営を担当する熱意を示す開会のことばで始まり、次いで野沢会長代理がおちついた態度で、大会準備関係者に対し謝意を表し、戦後の学校体育が目標の明確さを欠き、不安定なあゆみのうちに多くの問題をかかえてきた反省から、教育課程の改善をめざす現況に対し、特に体力づくりや学習指導上の問題究明に、本大会の意義や役割があることを強調するあいさつと西村体育課長が体育やスポーツの意義と本大会の成果を期するあいさつとがあつて、岐阜県知事ならびに市長（代理）など来賓の祝辞が、いづれも本大会開催を歓迎することばで述べられた。然して小山岐阜県体育課長から講師団の紹介がなされ、拍手の余音とともに開会式の幕は静かにおろされた。

表 彰 式

高揚した開会の雰囲気の中で、全国小、中、高校56校の保健体育優良校の表彰が本部坂井田氏の司会で開式した。

先ず小、中、高校の順でそれぞれ校名が発表され、満場の拍手に迎えられた代表者は感激の面もちで所定の位置に整列、各代表に対し、野沢会長代理から特大の表彰状と記念楯が手わたされた。次いで会長代理は中央審査会が満場一致決定した経過を報告、これまでの研究成果を讃え、さらに今後の努力を期待するとあいさつし、文部大臣の祝辞（別記）が西村体育課長によって代読された。

かくて最後に表彰校を代表して、次年度開催地大阪市立平野中学校長西岡氏からねんごろな謝辞が述べられ、今後も研究精進を重ね、今日の榮譽にこたえたいと力強く結んだ。ちなみに当日の表彰状受領代表は次のとおりである。

小学校 群馬県館林市立第二小学校長

永 井 喜平治氏

中学校 千葉県印旛郡印西町立印西中学校長

密 島 和 二氏

高 校 東京都立上野高等学校長

矢 谷 芳 雄氏

全 体 会

緊張のうちに進められた二つの式もとどこおりなく終り、いよいよ研究大会の日程は全体会の場に移された。

岐阜県が一体となって一貫した方針に基づき研究を重ねてきた「運動技能の 効果的指導について」和田弘氏によって提案された。氏はやや迫力は乏しかったが、整理された論旨をもって、運動上達の過程を明らかにし、それに即して指導することが効果的であるとの立場に立って、全体から部分（さらに全体へ）という指導過程を検討し、それぞれの種目についての指導計画を構成しようとする趣旨を述べ、さらにこの趣旨の実証は、部会毎の研究発表や研究授業に求められたいと結んだ。以上の岐阜県提案のテーマは午後からの各部会におろされ、それを究明しようとする会員は各の会場に向った。

○ 部 会 場 め ぐ り（17日の午後）

わたくしは、野沢会長代理に代って、県教委の小山体育課長のご誘導で、文部省西村体育課長に随行して各部会場をめぐり、その実況の一端を見聞した。これらの内容については本紙の報告によって詳述されるので、その模様だけ紹介する。

高等学校部会は全体会場の北高校の体育館で行われ、会場には約 270 名の会員が集まり、陸上競技の指導についての発表がなされており場内はおちついた雰囲気が感じられた。発表者は豊富な資

料を掲示し、消化された内容を明確に説明、その趣旨はよく理解できたが、会員から期待する発言も聞かれぬまま、何か物足りない気持ちでそこをひきあげた。こんな余感から考えて、問題究明の討議を求めるとしたら、種目別分科会方式が効果的ではないだろうか。

次は明郷中学校 体育館の 小学校 部会場を訪れた。ここでも全員を対象として研究発表が続けられていた。約 800 という盛況ぶりで、ちょうど女子代表による「表現の指導」についての発表が終わり、器械運動（前まわり）の発表を聞いた。場内にはメモをとる人も多数で、研究熱心な様子がみられたが、発表内容はいささかあえて理論づける傾向があって、内容究明が形式化されていた。このことはあとで車中でささやかれた西村課長の感想にもそのひびきがあった。

しかし、これはいわゆる研究発表という場が、あえて問題づくりをする結果ともいえるが、小山課長やそのときの司会者の話によれば、これらの研究は単なる一時的なものでなく、小体研という組織をとおして、熱心な継続研究によってまとめたもので、自信をもった発表で理解と関心が深いとうかがい、岐阜県のまとまった研究姿勢に対し改めて敬意を表した。

最後に中学校会場の長良中学校を訪れた。ここは小学校や高等学校とちがって、各種目別の分科会方式で研究協議が行われていた。わたくしたちは球技（バスケットボール）の会場にはいった。ちょうど研究発表が終わり質疑応答がされていたが、やはり分科会の小さいままとまりと、参加者もその種目に理解と関心が深く、質疑や意見も活発で、内容的にも充実しており、単なる理論展開ではなかった。特に発表者の応答は明確で、着実な研究成果がうかがえた。このことはあとで鈴木講師と交した話によって裏書きされた。わたくしはいささか疲労を感じ、ご案内の小山課長さんの労を謝し宿舎にもどった。

○ 優良校祝賀パーティー

恒例の表彰校祝賀パーティーは、同じ日の午後 6 時頃から宿舎「高間」の 6 階大宴会場で開催した。連絡上の不徹底と会場の都合で参加者の出足はおくれたが、会は手なれた坂井田氏の司会で進められ、先ず文部省井上調査官の音頭で乾杯、野沢会長代理のあいさつ、西村課長の祝辞について、表彰校代表のよろこびにあふれた謝辞があって懇談にうつった。

やがて次々と運ばれる料理でビールの栓は活発に抜かれ、うちとけた場内の雰囲気に応じ交々立ってのテーブルスピーチから、さてはお国自慢の民謡が紹介されるなど、和気あいあいのうちに予定時間はとくに超過、ようやく一巡したのをしおに、文部省井上調査官の発声による優良校の万歳三唱で会を閉じた。

大会をふりかえって

今回の岐阜大会はその規模、内容からみて盛大かつ充実した全国大会といえよう。わたくしは詳しい経過の認識はないが、2 日間の日程の結果から所感の一端をひろい、今後の参考に供したい。

1. 大会主管の岐阜県が一体となって、周到な企画により、熱意ある運営に努められたこと。

物の成功には、天や地の利によることも多いがその根源は人にあることはいうまでもない。今回岐阜県における役員組織をとおし、それぞれの担当に意を尽された誠意ある運営努力には頭が下がった。ここに成功の要因ありといえる。

2. 岐阜県が一貫した研究主題によって、共通理解の研究を重ね、明確な立場で筋のおった提案をされたこと。

充実した研究には、そのよりどころとなる提案

が明確でなければならない。今回岐阜県が示した態度は研究成果につらなる筋道といえよう。

3. 参加者が予想外に多かったこと

折角内容ある研究でも、参加者の多少によって低調に終ることがある。今回は時を得たこともさりながら、岐阜県の熱意と相俟って、予想外の参加を得、1500部の研究紀要が不足したという嬉しい悲鳴が関係者の間に伝えられた。

4. 連合会を代表する役員の欠席は遺憾である。

今回の岐阜大会が予期以上の成果を納め得た蔭には地元岐阜県のなみなみならぬ努力と水ももらさぬ進行ぶりと相俟って野沢理事長が、最高責任

者としての重責を立派に果たしたことは特筆してはばからない。

野沢氏は風邪を押してその責めに努めたばかりか、すべて適切な指導と研究大会の性格に応ずるあいさつなど実のある代行を果し、本大会の意義づけを明確にした。

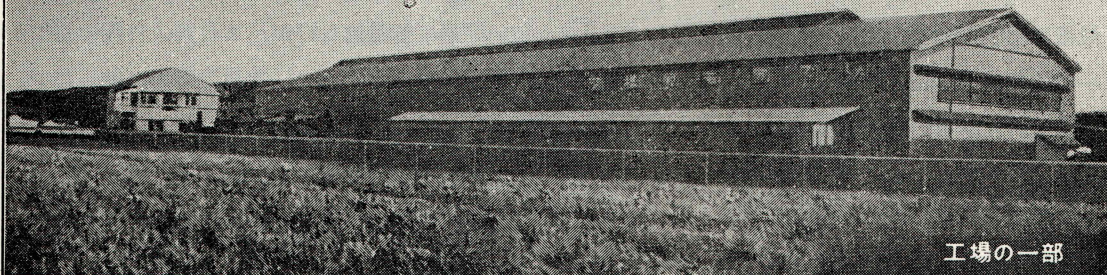
5. その他

大会充実の成果に比して、残念なことは運営上の連絡がその場限りであったことや宿舎に関する批判が多かったことなど、今後の課題として十分検討を必要とする。

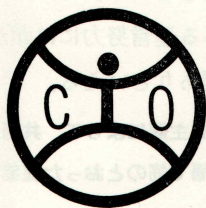
(連合会本部派遣 小碓記)

体育器具遊戯具
体育館内部施設

設計・製作・施工



工場の一部



日本体操協会指定工場

K.K. 小川長春館

福山市引野町

TEL ② 0209
③ 3099

第五回 全国学校体育研究大会

※ 問題提起

「運動技能の効果的な指導はどのようにしたらよいか」（「大会紀要」詳述）

提 案 者 大会研究部長 和田 弘
岐阜県立北高等学校教諭

◇ 小 学 校 の 部

器 械 運 動 陸 上 部 会
ボ ー ル 運 動 リ ズ ム 運 動

◇ 中 学 校 の 部

器 械 運 動 陸 上 競 技 柔 道
バスケットボール バレーボール ダ ン ス
サ ッ カ ー

◇ 高 等 学 校 の 部

器 械 運 動 陸 上 競 技 剣 道
サ ッ カ ー 総 評

主 催 文 部 省・日本学校体育研究連合会
岐阜県教育委員会・岐阜市教育委員会
主 管 岐 阜 県 学 校 体 育 研 究 連 合 会

小 学 校 の 部

器 械 運 動

講 師 野沢要助 (都立富士高)

助言者 山添鉄弥 (岐阜大学)

藤垣悦夫 (岐阜県教委)

発表者 奥村 収 (加納小)

授業者 滝森勝美 (長良小)

<鉄>腕立て後ろ回り (5年)

土田上一 (長良西小)

<跳>腕立て閉脚とび (4年)

服部弘文 (長良小) <マ>前回り (2年)

研究員

赤塚和男 (白山小)	小川国男 (三里小)
奥村 収 (加納小)	川島久吉 (三里小)
木野村祐一 (島小)	木村勝次 (金華小)
後藤弘文 (厚見小)	小酒井ユリ子 (梅林小)
高橋武敏 (方県小)	滝森勝美 (長良小)
土田上一 (長良西小)	徳永和彦 (常盤小)
中村庄太郎 (梅林小)	長野喜弘 (三輪北小)
服部弘文 (長良小)	早田静男 (大桑小)
日野悦慈 (茜部小)	松岡忠夫 (堀津小)
南村 肇 (木之本小)	村瀬二郎 (長良小)

問題1 前回りの指導の要点をどう考えるか

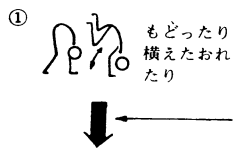
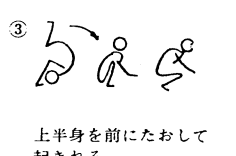
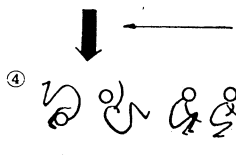
(岡山、佐賀、滋賀)

運動技能の指導において、うまくできる段階の運動ぶりを重視して「背を丸めること」とか「ひざをかかえること」ととらえても全部の子どもに有効であるとはいえない。

だれもが必らず通る「うまくなっていくすじ道」がはっきりすれば、ある段階から次の段階へ早く進める手だてが指導の要点となるはずだ。た

たとえば次表の①の段階の子どもを、②の段階に高めるには、手のつき方や踏切り方が要点ではなくてひっくりかえることになれさせることである。できない子を、補助や補助具でできてしまう状態

前回りの指導過程

上達していく姿	指導の内容
①  もどったり横えたおれたり	ひ か つ く り こ と ○補助一腕を支えてやる ○補助具一斜面 ○くびのまげ方
②  ひっくりかえる	前 方 へ 起 き 上 が る こ と 連続して回ろう ○上半身を前方にのり出す ○起き上がったに早く前方に手をつく ○ひざをしっかりとまげる
③  上半身を前にたおして起きれる	回 転 力 で 起 き 上 が る こ と 連続して回ろう ○起きるときにグッとからだを小さくする ○ひざをかかえこむ
④  回転力でおきあがる	

にしてやらせることで、前へ回る感じをつかませることが大切であろう。②の段階から③の段階への子には、起き上がれないのを起き上がれるようにすることが要点になるはずである。上半身を前方へのり出すこととひざをしっかりとまげることを指示し、起き上がったら続けさせることが大切だ。「ゆりかご」を指導すれば②③の段階をへないで④に進むのではないか。とか「ゆりかご」の指導が不十分であるので②や③の運動ぶりがでて

くるのだから「ゆりかご」の練習をさせるとよいとの意見であると考えられるが、大きくゆする子どもでも②や③の段階を通る。これは「ゆりかご」の「ゆする感覚」と「前回り」の「前へ回る感覚」とは違うということを示していると考えられる。前へ回りながら、自分のからだがどうなっているかがおおよそつかめるまでに感覚的に育たないと「ゆりかご」で起き上がる——部分の——練習をしても、ひっくりかえりとおき上がりとうまくつながらない。「ゆりかご」は、ゆする感覚を育てる大切な題材であるが「前回り」の技能の本質である回転することとは直接つながるとは考えていない。

前回りの調子をわからせ、前回りの感覚を育てるには、前回りそのものをやらせなくてはいい。(岐阜)

②から③への段階において起き上がるのが指導の要点であれば、起き上がる動きのタイミングをつかませるためにゆりかごは必要である(岡山)

ゆりかごは1年のマット遊びで十分指導しなければならないが、前回りの指導に2年で入ってからは、かまへの姿勢から前へひっくりかえり、ゆりかごで後方にゆれた状態になるまでの過程で身体の位置感覚がくずれてしまって、ゆりかごと同じ動きができないのだから、ゆりかごの指導が生きてこない。だから前回り全体をやらせるべきだと考える。(助言者)

問題2 運動感覚と運動技能について

子どものからだに、一つの運動が成立するためには、感覚面だけでなく技術的な面もあると思うが、基礎的な感覚と運動技術との結びつきを、どう考えたらいいか。(滋賀)

基礎的な感覚が身についたというのは、マット運動でいえば、前後に回ってもこわくない、回る時、おおよそからだがどうなっているかつかめる状態であり、鉄棒運動では、鉄棒の上に上がっ

ても平気であり、前へ回りながらおりるのがこわくなく、いろいろな形でぶらさがってもこわくない子の状態をさす。水泳を例にあげれば、水中で動くことがこわい子に、いくら平泳ぎや浮身の技術を指導しても習得できない。まず水をこわがない子にしてから、技術を指導すべきであろう。器械の場合も基本的態度は同じである。(岐阜)

腕立て後ろ回り(鉄棒)の本質は腕立て姿勢で後方に回転することであるととらえ、はじめは後方へ腕立てで回る感覚を身につけさせるためともかく回る→かるく(続けて)回るから美しく回るかという順序を考えているが、回転感覚ということからなら足かけ後方回転でも同じで、身につけさせられるのではないか。(岡山)

感覚を単なる知覚ととらえれば同じである。しかし、運動のやり方が変わった場合動きは違うが感覚は同じであるとは即断できない。動きが違っていると神経のメカニズムも違うと聞いている。倒立ができる子どもに、頭支持倒立をさせたら失敗して前転になってしまったのはその好例であると思う。(岐阜)

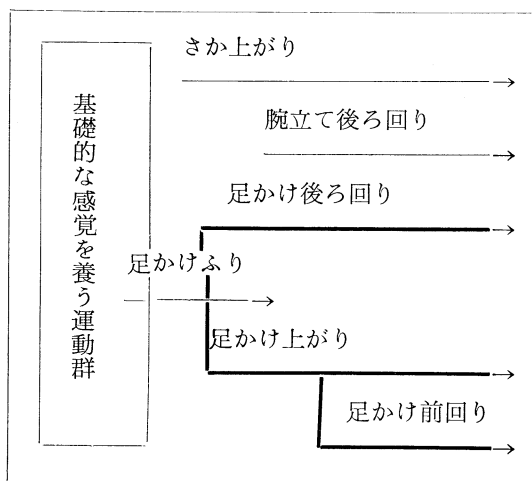
問題3 運動の系統について

さか上がりと腕立て後ろ回りとは全く関係のない図式で表わされ、足かけふりや足かけ上がりなどは関係づけられているが、どういう考え方によるものか。(愛知)

従来、さか上がり——腕立て後ろ回りという関係でとらえられていたが、までからだを引き上げるさか上がりと、腕立て姿勢からこの図の状態まで回転させることは、技術的に本質的な違いがあって、さか上がりがどんどんうまくなっていったら腕立て後ろ回りになってしまったということではない。だからさか上がりと腕立て後ろ回りとは感覚的に似た点はあっても、それぞれははじめから、運動を全体として学習させるべきであると考えている。4年生でたしかめると腕立てう

しろ回りの成功者よりさか上がりの成功者が多いので、さか上がりを先にやらせることを考えている。しかし、3年でさか上がりは既習しているので、なお検討されるべきであろう。

鉄棒運動の系統（一部抜萃）



一方足かけ上がりなどは、足かけでふれなければ、足かけ上がりはできないし足かけ上がりができなければ、足かけ前回りが成功しない。しかもみながこのすじ道をへる。ところで、「足かけふり——足かけ上がり——足かけ前回り」のようを示し方をしなかったのは、足かけふりがうまくなった最終の段階が足かけ上がりでなく、ある段階まで上達すると、足かけ上りを全体として学習し習得しうる用意ができることを示すためであ



る。こうした考え方によって枝分かれの系統を構成したのである。

（岐阜）

問題4 体力づくりについて

体力づくりは近代トレーニング、補強運動などによって筋力を強化することが、技能をも伸ばすことになると思うがどうか。

（佐賀）

補強運動は否定するのではないが、小学生には運動技能を高めるよう指導するなかで、体力づく

りをするかまえている。体力づくりを小学校では筋力強化のみと考えずむしろいわゆる調整力を高めることが、子どもたちの発達段階に合った体力づくりだと考えている。

（岐阜）

子どもの発達段階に合った力を身につけさせるのが、小学校の体力づくりだと考えている。

（愛知）

体育学習の場だけで、体力づくりを考えるのではなくて、子どもの生活全体において考えるべきであると思う。この研究は直接体力づくりという観点に立っていないが、原則として小学校の体力づくりは、技能づくりを進めるなかで考えたい。体育の生活化もそうした点を考えて推進させたい。

（助言者）

子どもの発育発達の面からも、健康増進の面からも、小学校時代でなければできない面をとらえて進めてほしい。

（助言者）

問題5 遅進児の指導

技能遅進児の問題が、高学年では特に大きい。公開授業では、さか上がりの練習をさせていたがどのように扱ったらいいか。

（三重）

補助具を利用して同じ腕立て後ろ回りをさせた方がいいと考えるがどうか

（愛知）

病弱で前学年まで見学することが多かったので基礎的な感覚も育っていない。チューブやロープを使用したか、かえって危険なので、それらの補助具の使用は考えていない。前時に2人で補助させたが、とても無理であった。自由時にグループで、みなに早く追いつくようにと、腕立てとび上がり——前回りからはじめさせ、補助台を使ったさか上がりか、できるようになったところである。授業中のみでは救えないと思う。（授業者）

運動の感覚を身につけるには、やってみないとだめである。できない子に実感としてわからせるための補助具や補助は大切である。けれども、そ

の運動を全体として習得できるだけの感覚が身についていない子には、基礎的な感覚を養う必要があると思う。(岐阜)

問題6 全体と部分のとりえ方

全体をやらせて、その運動の調子をつかませるとはいうものの、足をひきつけよ、上体を前へのり出せ、という公開授業の指導は部分の指導ではないか。(岐阜)

部分は全体の中で、どのように方向づけるのか(愛知)

とび箱運動の技能の本質は、とびこすことにある。とびこすためには、足をひき上げ、上体を前へのり出さねばならない。こうした動きをとびこす全体の動き(助走——ふみ切り——空間姿勢——着地までのすべて)の中からわからせるよう考えたのであり、台上にのってしまう子も、とびこすという意識でやっていたのであり、補助によってそれを助けたのである。(授業者)

とべない子の解決策として兎とびや腕立てとび上がりなどを練習させたかった。(岐阜)

あの学級の子どもたちは兎とびや腕立てとびのりでは全員が指先より前へ着地すると聞いている。5年で閉脚とびこしのできる子どもに腕立てとびのりをさせ手より前へ着地しなさいとやらせたところ、 $\frac{1}{4}$ 強の子が不合格であった。前端に落差があることが、決定的条件であるから、全体として練習させ、ひざのひきつけだけの練習といった部分をとり出した練習はいみが少ない。

前回りの授業で、なにかをはきでひざをそろえて回る実感をわからせることが考えられるが、どうか。

前回りの本質は回転することである。ひざをそろえることは、この本質からはずれた審美的要素でもあるから、本時ではひざを開いてでもよいからまず続けて回ること重点をおいた指導であっ

たと思う。なめらかに、スピードのある回り方になって子どもが、ひざをとじた方がよいと見つける。そういうかまえであったと思う。(岐阜)

<講師のまとめ>

器械運動では、危険防止につとめながらうまくすることが最大の課題である。

○こまかい順序だてをする

○子どもの個人差が大きいので注意を要する

きょうの発表も運動を合理的によく分析してやられたが、新しい一つの方法としてうけとめたい。

運動を分析すると、技能の構造上でいろいろな要素があり、また運動の系列もある。これらの過去のとりえ方がまずいかいかに問題である。また指導の内容についても実証の段階で問題点を含んでいるようなので、一層研究を進めてほしい。

体力ということばは、いろいろな意味にとられ内容もまちまちであるが、小学校の体力は子どもの発達と関連して考える共通点に立てて安心だ。

本当にこの運動のどこが悪いかは、子どもにはわからない。児童1人1人の欠陥は児童同志の見合いでは充分でなく、教え合いにも限度がある。それは教師がよく知って指導すべきであって、最近、教師の指導性が後退しているのが実情だ。

運動を身につけるのに、ためしの段階、修正し定着する段階、活用の段階があるが、悪いくせがためしの段階でできなかなかぬけられないことがある。だから修正する段階をわすれてはならない。この修正の段階にこそ、教師の指導性が要求される。

転回と回転ということばは区別して使っていたが混同してきている。これも整理する要がある。

陸 上 部 会

講 師 高田典衛（東京教育大付属小）

助言者 奥田英二（岐阜大学）

山田正堅（県教委）

発 表 者 大塚亮一

授 業 者 平田隆夫（5年走り幅とび）

中島 勝（4年走り高とび）

司 会 者 今井太郎、日野信男

記 録 者 平田毅、丹羽弥寿彦

研究委員 安藤昭夫、赤梅昭三、上野雅夫

加藤快教、神谷重平、左高幸夫

杉山正之、滝日 治、竹内久雄

名和 清、水谷康博、山本文治郎

◇ 走 り 幅 と び の 部

前日の全体発表を基盤に、走り幅とびの上達過程のとらえ方は、これでいいのか、また上達過程に即した指導過程は、これでいいのかどうか、きょうの授業とてらしあわせながら、いろいろと検討してほしい。

授業者反省

かがんだとぶ段階のc～dにうつるところを指導したわけだが、そのうち本時は、たたきつけるように強くふみきることとにねらいをおき、そのためには、どうしたらよいか、と、いうことで、たたきつけるようにふみきるにはふみきるとき、ももを高くあげて上からたたきつけるようにする。助走から、ももを高くあげるようにして、ということに指導のポイントをおき指導した。（岐阜）

問題1 教材の組み合わせについて

- ① 1時間中、走り幅とびばかりで通してやられたが、何か理由があるのか。（石川）

○平素は、他の教材と組み合わせて実施しているが、研究会の資料提供という意味で、ひとつにしぼってやったのでご了解願いたい。

○本校のカリキュラムには、鉄棒運動とくみ合わせ実施している。（岐阜）

問題2 助走距離の問題について

- ① 足うら全体でたたきつける、ということを経験したのだから、ふみきりのところにポイントをおき、2、3歩前からたたきつけることを、じゅうぶん指導して、その感じをつかませるような手だてを考えたらよかったのではないかな。（石川）

○今までによく行なわれた練習方法であるが、部分的に練習したことが、全体に戻したとき果して生きるかどうかは問題である、小学校段階では、一連の全体を通すなかで、何を指導するかというように考えていく方が有効であり、子どもの願いにかなった指導であると考えて。（岐阜）

○助走距離は、3年7～8m位、4年9～10m位、5年15m位、6年22m位が適当であると考えている。（岐阜）

問題3 記録をとることについて（大阪）

○本時のねらいを生かした上での記録をとった。今後もとっていききたい。興味を持続させるためにも、はげみが出ていいのではないかな。

問題4 ふみきりについて

- ① 走から上昇へかえるとき、即ちふみきりに入る瞬間、リラックスするとか、かかから入るような気持ちで、ふみきるよう指導するとよい。（石川）

② 上からふみつける、足うら全体でふみきる、助走——リラックス——ふみきる
この三つは、それぞれニュアンスがちがうが、

その指導の手だては。(滋賀)

③ 最後の1歩をちぢめて、走から跳にかえることが課題であると思う。(静岡)

④ 子ども同志の注意では、ふみきりが、強い弱いというだけだ、もっとちがった助言のしかたはないものか。(石川)

○リラックス云々というようなことは、とても高度な段階で、要求したり、気づかせたりするのは、もう少し先の腰を伸してとぶあたりで、子どものすがたを無視して、教師だけのイメージでもって指導することはいけないと考える。そのために上達過程の把握ということに力をいれたのである。(岐阜)

○力強くということは、初期段階から、うまくなかった段階にまで通ずることであるが、どの段階にあらうが、ただ力強くのくりかえしでは、指導の意味がない。段階に応じた助言がある筈である。本時は、そういう意味で、尚一層力強くさせるために、たたきつけてふみきりましょうというようにもっていったわけである。

(岐阜)

○最後の1歩をちぢめましょう、という指導だけではいけない。なぜなら、子どもは、どうしてちぢめなければいけないかわからないからである。歩幅のことがここでは問題でなく、強くふみきることが問題なのである。今日の場合、ももを高くしてたたきつけるということで、そんな中で、ややせまくなるんだなと気づいてくればいいのではないか。(岐阜)

○音を聞いて、その強弱をみる場合もあると思う。きょうは、もものあげ方によって、たたきつけ方がちがうという観点でみさせたらいいのではないか。(岐阜)

<ま と め>

今日のねらいは、ふみきを強くということ、めあては、たくさんとぶことだ。そのため強

くふみきる必要性の強調ということで、子どもにとっては、きょうの授業は、ややむづかしかったのではないか。

これは、ある学校の例だが、助走にスピードがあった方が、よくとべるということをわからせるのに、助走の距離を一定にして、ストップウォッチで、助走時間をはかり、なるほど、助走を速くした方がよいということを示していた。

きょうの場合、3歩助走、5歩助走などでもっと、子どもに、ふみきりの重要性を具体的にわからせる手だてがいったのではないか、感じとしてはつかめたようだが、確実なものではなかったようだ。

(ここで、短助走のことが問題になる。前に述べたので略す)

<講 評>

様相をつかんで、それに即した指導の方法が研究され、上から与えていくといったふうでなく、子どもの立場にたって考えられているということは大へんいいことである。ただこれを様相というとならえ方だけでなく、記録と様相との関係がつかめたら、なお、おもしろい研究となるのではないかと思う。

走り幅とびとは、何cmとべるようになったかだ、距離と上達過程が一致していたらおもしろい。

小学校の陸上は力をますことだ、個人の力を伸ばすことは陸上に限る。教材の独自性を生かした指導がなされるよう望む。

◇ 走 り 高 と び の 部

問題1 踏み切りの指導をどうしたらよいか

① 強くふみ切って、ふり上げ足を高く上げるのは、4年生としてやや問題があるのではないか、バーに対して、できるだけ鋭角にしてとば

- せたらよかったと思う。さいごの一步の足の向きを、どうおさえるかが問題である。(石川)
- ② さいごの一步を、横へもっていくのではなくて、助走の力のかかとでおさえて、そり身にさせる事が大切である。
- ③ 理想的には、まっすぐ足を入れて、助走力をおさえるのが正しいと思う。(助言者)
- ④ バーの上で、時間が保てるようなとび方が必要である。(石川)
- ⑤ その通りだと思う。正面とびの場合、足の外縁で、ぐっと力を入れる。(助言者)
- ⑥ ふみ切りを強くという事をおさえるのであれば、低いバーで助走距離を短くしてやれば、その感覚がとれると思う。(石川)
- ⑦ 子どもの入り易い姿は、斜めから入って斜めに足を入れることではないだろうか。
- ⑧ 「斜め助走がいいんだぞ」ということから、はさみとびに入らせていく。(岐阜)

問題2 ベリーロールについて

- ① ベリーロールは、小学校の時の方が教え易いという考え方があるが、どうだろうか。(講師)
- ② ベリーロールは、危険ではあるが、着地の練習をどしどしやっておけば、いいと思う。
- ③ 私たちとしては、危険であるので小学校では、無理だという立場をとっている。(岐阜)
- ④ 着地の問題さえ解決できれば、やらせてよいと思う。(助言者)
- ⑤ 危険なものとは考えない。5・6年でやらせてみると、記録的にはベリーロールの方がよい。(青森)
- ⑥ 正面とびをどんどんやらせてよいがそれ以上記録を上げる、という時、ベリーロールに入っていくとよい。(石川)
- ⑦ そういうものではなくて、ベリーはベリー正面とびとは質がちがうのではないか。

- ⑧ ベリーロールならよいが、正面とびではんでだめだという子どももいる。

- ⑨ 1m30cmを試技する子どもが10人くらいいるクラスで、両方やらせてみたが、女子は殆ど正面とび、男子はベリーロールを喜んでやっていた。

男子はおもしろい、といっているが女子は殆どこわいという結果がでている。(講師)

- ⑩ 手、あるいは背中から落ちるという事から、回る事に力を入れて記録は向上しないのではないか。

しかしとぶ調子はうんと身につけていくことを重点として考えていきたい。

はさみとびをずっとやっていって、ベリーロールにいくものではないし、どこからどのように枝かわれしていくのかどうか、その様相については、今後の課題として研究していきたい。(岐阜)

<講評>

昨日の発表などを含めて、非常に印象的であったのは、全領域にわたって＜子どもはこうなっていくのだから、こう指導したらよい＞という考え方をもとにして意欲的にとりくんだということである。

従来の＜走り高とびはこういうものだからこう教えたらい＞というものに対して、今回の岐阜の考え方は画期的なものであると思う。

小学校時代の子どもは、どんな成長過程を通していかという事を、従来いわれながらもなかなかできなかった。その点について総力を上げてとり組んだ岐阜県に対して敬意を表する。

なお、わたしの調べた記録から、跳という立場でみた子どもはどうかというと巾とびについては男女差がはっきりしている。6～11才まで確実に記録が上っていく、高とびになってくると、動きがデリーケトであるだけに女子の方が3年から6

年までは、男子をオーバーしていくという傾向にある。

最高でいくと女子が1 m47、男子は1 m35を跳んでいる。男は巾、女は高に強い。跳、走などは、動きだけではなくて<力>としてとらえることも大切である。

部分的に動きが高度化していくということは、<力>と相関の関係にある。

女子の方が、よいというのは調整力の発達の度合が、女子の方が早いからであろう。

全体の様相を動きと合わせて<力>として捉えることが必要である。このように考えてくれば、全習・分習の問題も解決されてくるのではない

か。45分間を4・50人の集団の中で「やっぱりそうか」、「そういうもののなか」、「ということが、授業の中ででてこなければだめである。

瞬発的なものについては、「ほんとにそうだなあ」「ほんとにそういうものか」、ということを見つけさせ、ぼくはどうすればよいかを見つけさせていくのが教師である。

さらにどんな<手だて>を加えたら、こんなことができる。という<手だて>をはっきりさせる研究をつづけていってほしい。(講師)

ボ ー ル 運 動

講 師 鈴木卯之吉 (全国連合会)

助言者 服部 武夫 (県教委指導主事)

発表者 小林芳雄 (岐大付小)

小学校体育の効果的な技能指導についての岐阜県の考え方と、ボール運動の具体について

授業者 戸本 亨 (長良西小)

3年 ラインサッカー

水野卓夫 (加納西小)

5年 ポートボール

島塚秀男 (鷺山小) 6年 サッカー

研究員

赤地総太郎 (長森南小) 井尾泰典 (島 小)

五十川恭司 (京町小) 小野武志 (島 小)

小林 芳雄 (岐大附小) 島塚秀男 (鷺山小)

鷺見 悦夫 (西武芸小) 武山 周 (鶉 小)

土田 勝美 (早田小) 手嶋 広 (則武小)

戸本 亨 (長良西小) 中島 秀 (岩野田小)

長戸 倫明 (市橋小) 長谷川勇 (鏡島小)

福井 澄夫 (京町小) 水野卓夫 (加納西小)

三輪 寛 (長森北小) 森晟二 (那加第三小)

研究提案

岐阜のボール運動指導のあり方

1. ゲームの様相をとらえ、その様相の発展に即した指導過程を組んですすめていく。
2. 小学校の場合、「全体」を行なって調子を覚えること。

「部分」は全体の中で、(全体への方向づけとして)行なう。

たとえば、ゲームの中でのボール操作ができればよいと考えている。部分は、ゲームの中でおさえなければよい。その場合、ツボをおさえているかどうかということが問題になってくる。

なぜ、ツボをおさえるのか。次の段階のイメージを指導者がもって、⑤の段階ならば、⑤の段階での指導のツボを適性におさえ指導しなければならない。③の様相で⑤の様相を頭に描いて指導しても、③の段階でのツボをおさえた指導とはいえないのである。

研究問題

1. ゲームの様相のとらえ方はよかったかどうか。
2. 部分のおさえ方は、これでよいか。

質 疑 応 答

◎男女差がかなり出ているように思うがどうか。

それを、どのように指導しているか。(静岡)

○種目によっては男女差という立場で考えなければならぬものもあるが、原則としては能力差という立場に立つべきだと思う。男の中にも女と同様に能力の劣る者もいる。能力の劣るということはどんなことなのかをよく考えてみるとゲームの中での動きとの関連において目立つことではないかと考える。だから、わたしたちはまずゲームの中での動きに重点をおき、ゲーム運びの技能を高めていくことを考えている。

(岐阜)

◎トラップする技術の指導——ゲームをより高めるには、如何にあるべきか。

ゲームの動きを高めるためには、捕球の技術指導も必要だと思うが。(静岡)

○技術指導の考えがちがっている。

自分のところへ、ボールが来た時、そのボールを、どのように処理して次への動作へ移るべきか。必要性に追い込むことが指導者にとってたいせつなことである。

サッカーのドリブルの必要性について考えてみよう。ドリブルを個別に指導して果してゲームの中でその練習の成果が現われてくるであろうか。また、そのドリブルの練習がゲームの中で役立った練習方法であったかを考えてみたい。わたしたちは、紀要 p. 52の実験を(実証 C)をしてみた。

その結果、技術指導のとり出す時期はまだまだあとでいいのではないかと考えた。

ゲームの中で部分をおさえていく。ゲームにより近いすがたで練習をさせていくという指導の方向ですすむべきであることがわかった。

(岐阜)

◎理想としては、ゲームでおしていくことはよい

が、技能の裏づけがあってこそ、ゲームが成立つのではないか。(新潟)

○ゲームの中でおさえていくと、子どもは必要性を感じてくる。また、基底技能は低学年でおさえられている。どうしても必要な補強をすべきだが、そのゲームが成り立たないような技能のまずい子はいない。(岐阜)

◎ゲームの様相と指導について

サッカーというのは、たての動きが必要だ。

たてに広がって攻めるということは、たてに動いて攻めるということか。

本時は第三次の指導であった。本時の斜め前にパスして走るというのは第二次での指導ではないか。きょうの場合だと相手の前に出てパスを受けるということが大切なのではないか。

(大阪)

○たてというのは、ボールの動きがたてに動く様相なので人の動きもたてになる。そこで、ボールの動きによって横への広がりを考えた攻め方を指導したい。横への広がりがもてることによって、ボールが斜め前にパスでき、攻める人はゴールへまっすぐ前に走るということを深めていきたい。

たてに広がるというのは、ゲームの様相で、人の動きの自然発生的にとらえたことばである。(岐阜)

◎ラインサッカーと、サッカーとのつながりがあのかどうか。(東京)

○ラインサッカーは「けり合い」のゲームである。この時期の子どもの技能は未熟であるので足でボール操作するのを、ラインマンが助けていく。フォワード同志がボールを互いにパスし合えるようになれば、サッカーへ移行してよいと考えている。(岐阜)

◎ラインサッカーで、コートの大きさと中にはいる人数との関係は、あれでよかったか。人数も少なくすれば様相も変わってくるが、ボールにき

わる回数も少なかったと思う。(東京)

○コートの大きさは興味からして本時の大きさとした。ラインマンの数が少ないと、ボールが外にはみ出しやすく、興味が薄れる。(岐阜)

○子どもの動き、キックの力から、コートの大きさはもう少し大きくしてもよい。しかし、このことは、人数を決めて、その上で研究を深め、どんな人数のとき、どうあるべきかをはっきりもって話し合うべきである。岐阜の場合は、6人の形式として話している。(助言者)

○ゲーム、ゲームでやっていくと欠点が出てくる。ボール操作が進歩していない。

子どもたちのボールにさわる回数が少ない。それで、5、6時間を経過していいのか。

(大阪)

○ボール操作ということは無視することはできない。しかし、ゲーム指導をすることの方が先だといっているのだ、全体発表で述べたB、B'の方法だと、ボールの受け方はうまくなるが、ゲーム運びのカンというものが育たない。その上ゲームにうまくなるということから、子どもたちの切実さが生まれて練習の仕方に意欲的となってくる。どこへ動いたらよいか分かり、ボールがもらえるようになる。もちろん、ボール操作がゲームを進めるのに困る程へたな場合には補強することも考えなければならないだろう。

(岐阜)

○基礎技能、応用技能などをやる必要があるという子どもの声は出てこなかったか。

よい場面に動くということと、体のこなしと二つの要求がある。

体のこなしをとり出しての指導の必要はないか。

(大阪)

○そうした声は出ていない。でたとしても、指導者の受けとめ方として、ゲームの場面を具体化し、その場面の必要性ということで話し合っているのではないかと思う。

体のこなしは、ゲームの動きの中でこそ達成できるものではなからうか。初歩の段階で、ゲーム場面に適する能力をつけていくことが最も適切な体のこなしを身につけさせることではないか。よりうまくという段階⑥では、抽出して行なうということを考えている。(岐阜)

◎Cの指導の方法だと、ボールの接触回数が少ないのではないか。(大阪)

○抽出していくと、ボールの接触回数は多くなるが、ゲームの中での動き、連携プレーなど養われない。わたしたちは、抽出する時期が妥当かどうか考えて欲しいといっている。

いつ、どこで、何を、どのように指導したら最も効果的かを、もっと具体化したいと考えている。(岐阜)

◎自由時に子どもたちが、パスやドリブルなどやっているから、あまり様相様相という必要はないではないか。

○クラブも教科も自由時も同じ指導のスタイルの中でやっていきたいという考えだと思う。

技能というものを、パスだとかドリブルなどに限定しないで、どう人が動いていくかということも大切な技能内容の一つである。(助言者)

◎学習・遊びの全体を通して考えられる子どもの様相はB、B'になるのではないか。(広島)

○小学校の体育の中で、もっと考えていきたいのは、どのように位置づけていくべきかでちがっているのではないか。(岐阜)

<ま と め>

1. 部分技能を今の段階ではとり出す必要がないといっているのである。けっきょく、いつどこで取り出すかが問題なのである。

2. ゲームの発展過程

全職員に徹底するには、時間毎に配分して指導してもらうことが望ましい。

3. ゲームの様相は今後、続けて観察し修正する

ものは修正していかなければならない。

4. 遅れている子の指導については、その原因を追求してみる必要がある。ボールを受けるための動きが出来ないのか、ボールが本当に受けられないのかの原因を確かめること。特別に補充してやる手だてを考えていかなければならない。

(助言者)

「考える体育」という強い傾向があらわれてきている。ゲームを追うという立場の中で、何かかくされている感じがある。

到達基準というものをふまえて授業をみていただく観点が生まれてきているのではないだろうか。例えば、ヘッディング、シュート、キックなどは、ゲームの手だての中で指導した方がよいと考える。

岐阜の考え方を前向きの姿勢で通していくためには、具体的な指導内容をゲームの中でどうおさえていくか、それが確かか、まだ具体的にははっきりしていないと思える。

(講師)

リズム運動(表現)

講師 中島 花(日本女子体育大)

助言者 毛利美恵子(県教委)

深尾 敏子(岐大付属小)

発表者 安藤寿和子(岐阜加納小)

授業者 中村政子(1年動くおもちゃになろう)

民田朝枝(3年 じしゃく)

藤垣淑子(5年 火が燃える)

研究員

安藤寿和子(加納小) 旧井 悠美(加納小)

大野 治子(黒野小) 織田ふみ子(長森北小)

小野鳥暁子(岩 小) 加藤ひな子(徹明小)

岸 今子(長森南小) 小池朝子(郡上川合小)

小沼 弘子(本郷小) 小森 光代(蓄部小)

民田 朝枝(長良小) 中村 政子(長良西小)

那波 教子(徹明小) 林 紀久子(白山小)

藤垣 淑子(明德小) 吉田あきえ(金華小)

問題1 表現の基本的性格と表現技能の発展過程について

提 案(岐阜)

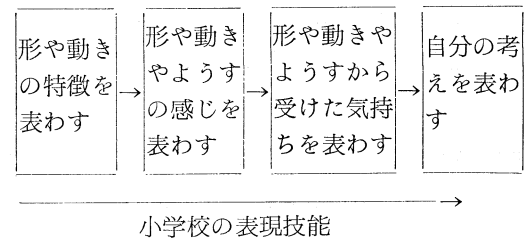
○表現とは自己や集団の表わしたいことを身体の動きで表わすことである。

○表現を心身の二面から分析的に考えると、対象のなにをどのように表わそうかと選び追求する心の働きと、心でとらえたものを、からだの動きにおきかえて動きを創り出す働きとがある。

○この二つの働きは、たえず相互に関連しながら表わしたいことを求めて変化発展し、新しい表現を創造するのである。

○表現技能とは「おどりをつくっておどる技能」であり、表現技能は、表わしたいことの追求と動きの創造との葛藤の中で発展するのではない。そして、その発展の姿は、「おどりぶり」でとらえればよいと考えた。

○以上のような立場を仮設として、実験した結果表現技能の発展のすじみちを次のようにとらえた。



○この発展のすじみちをあきらかにするために、指導過程をくみ実践によってたしかめつつある。とくに各段階にそくして位置づけられた、題材例は指導のきめてとしての重要な意味をもっている。

協 議

(1) 題材の選定について

○年間計画はどうなっているか。

○こどもの願いをだいにすることもわかるが、指導の立場からもっと他にたいせつな要素があると思うが。(京都)

○体育の中の表現として、運動の特性や、バランスを考える必要がないか。(滋賀)

○現在は研究の途上で、表現の大まかな筋道をつかみ、その筋にそって題材群をつかんだにすぎない。したがってどの月になにをするというような細かな計画はもっていない。今後実践してたしかめながら、本当の教材づくりをし、その積みあげの中で系統をたしかめていきたい。(岐阜)

○表現の指導の立場からもっとたいせつなものとはなんだろうか。わたくしたちは、それぞれの段階に合わせ、題材選定の条件として、どこまでもこどもたちの表わしたいことをたいせつにするなかで、身体の動きに対しても配慮をはかっている。ただ体育だからといって、また体力づくりだからといって表現としていみのない、動きを指導することはしたくないと考えている。本県としても、5、6年前に動きの調査研究をしこどもに可能な動きの種類を調べたことがあるが、しかし、それがこどもの表わしたいこととどう結びつくかということに無理があった。(岐阜)

○体育の中の位置づけという点について、わたくしたちが基本的に考えていることは、こどもたちが表わしたいことを表現する、その過程で体力がついていくという立場をとっている。唯単に運動面からのみ追っていくと、こどもの表現そのものからいえば必然性がないために、発展しないと思う。現在のわたくしたちの実践からいえることは、こどもたちに豊かなとらえ方をさせ、表わしたいことを追求させれば、動きは変化発展し、豊かな表わし方ができると考えている。またそのために題材をどう与えるかが重

要なきめてになると思う。そうした点からも、感じを表わす段階の、粘土、がらくた、お湯がわくなどを構成してある。(助言者)

○こどもが実際のものを見て得たものをもとに表現していく岐阜のいき方は賛成である。指導書に示されたものは例であるのに地方ではこの例がたいせつにされすぎている。(広島)

○授業でこどもがよく動き、よく発表している。だが題材選定などでこどもをたいせつにするといいいながら、それと授業がぴったりしていない。全般に少し高度すぎるし教師が感じ、気持ちということを打ち出しすぎて指導の意図が強いのではないか。(大阪)

○授業中に使用した表のことばなどもありのまま。教師とこどもがともに表現しようという姿勢でそのものを見て表わしたいことをきめたのである。(岐阜)

○「火が燃える」を見て、もっとこどもが暖かいとか、やさしいというものを感じなかったか。6年の作品の映写をみても、動きがよくにている。

岐阜の研究グループでは、「火が燃える」というのはあのようなものだという先生方の指導があったのではないか。(東京)

○こどもの表わしたいことをだいにするといっても、なんでもこどものやりたいことをやらせろというのではない。こどもは、人間としての発達にそくして表わしたいというねがいがかわってくるはずである。したがって表現の指導は、そのかわっていく筋道にそくしてその段階を充分熟させ、さらに次の段階へ発展させるための指導でなくてはならないと考えた。そのために、「火が燃える」という題材もくみ、充分そうした意図をもって指導しているのである。しかしその題材からうけるこどものイメージを教師がゆがめるようなことはしていないつもりだ。(助言者)

○岐阜は努力のレベルが高い。動きにはいろいろあるはずだ。文部省の指導書に示されている、機械や建築作業のようなメカニクな動きも教えていいと思う。岐阜でくまれている、「風が吹く」「火が燃える」「雪がとける」などは同じような動きをもっているのではないか。

(大阪)

○洪水を6年にもってきた理由はなにか。

(東京)

○岐阜でくんだ題材例の中からもメカニクな動きは充分出てくる。洪水は直接、間接の生活経験もあるし、洪水そのものからの感じだけでなく、洪水からうける、自分の気持ちのようなものにまで発展できると考えてくまれたものである。

(岐阜)

○岐阜のこどもの表わしたいことをもとにした、この研究の立場はよい。こどもの感覚というものはすばらしいものである。そうした点からもこどものとらえ方や表わし方を低学年から積み上げていくことはたいせつである。(三重)

<ま と め>

○発展過程をとらえる基本的な考え方として、表わしたいことを追求することが、技能を発展させることであるという考え方はよいと思う。

○指導の段階が大まかに三つに分けられているが、岐阜の現状としてはよい。しかし児童の実態によってきまるものだから、岐阜の例が、どこでも誰にでもあてはまるものではない。芸大付属の児童にも指導を行なったが、4年生で感じが出てきている。ステップをふんで指導をすれば感じも自然に出てくるから、岐阜の場合でも、高度だとか、無理だとはいえない。

○題材についても、指導書に示されているものは題材例である。しかしどの地方でもそれを、うのみにして実際に合わない観念的で、上すべりな事をやっている。そうした意味では、岐阜の

こどもの立場に立って題材を選ぶという、この研究のすすめ方はよいと考える。

○内容のとらえ方は、物語的、文学的な要素は排除し、そのものずばりをとらえて表わすことがたいせつだ。その方がこどももやりやすいし、全身がうちこめる。あれもこれもではぼけてしまう。(以上のまとめ講師)

○岐阜ではよいが、他県ではいけないというような表現の指導のすじみちではあいまいである。もっと一般的なものが必要である。(東京)

○講師がいわれたのは、こどもの表現の発展のすじみちについては、全国どこでも共通であるがその指導にあたっては、こどもの現在の実態をよくみて、その段階に合わせた指導をしなくてはならないという意味であると思うが。

(助言者)

○その通りで、実態によって感じの段階までについていない4年生には、はじめの段階から指導して、終わりには感じを表わすねらいにまで引き上げるべきだという意味である。(講師)

問題2 指導過程の基本的構想について(授業を中心にしながら)

○ずばりととらえて表わすということだが、きょう授業で与えたおもちゃは、動きの少ない、犬、蛙、円盤であった。そんなものをみせて表わすよりも、もっと生活経験をとりあげて表わさせる必要があるのではないか。

○ずばりということは、とらえたそのものを表わすということである。ほんとうの蛙は前の動物ごっこで扱うもので、本時は、おもちゃの動きの特徴をとらえて表わすのである。

(講師、助言者)

○具体的なきょうの授業の場合、教師はどのへんまで引き出したいと願っているか。また、どの程度までまとめるのか。

○音楽がなかったが、これでいいのか。(東京)

○5年の場合、表わしたいことが、他のこどもがみても、それらしい感じが出ていればよいと思う。また、まとめ方は、はじめ、中心、終わりと、一連のものにさせたい。(岐阜)

○3年では、じしゃくのもつさまざまな現象の特徴をとらえて表わせばよいと考えている。

作品のまとめ方は、現段階では自然でよく、無理にまとめようとはしていない。(岐阜)

○音楽については、リズムは動きとともに作り出され、動きと一体のものである。したがって口リズムや声、タンブリンの音が現在では、伴奏音楽になっている。(岐阜)

○音楽があると動きやすいが、今回は、自分たちのみつけた動きが中心になっているから、それに合わせた音楽でなくてはならないと思う。

動きに合わせた音楽をつくってもらうこともあり、また、バックミュージックとしての音楽を使う時もある。(岐阜)

○音楽を与えると、それに拘束されやすい。形式や他のものにしばられない自由な動きで表わしたいことを表現させたいから、音楽を自分たちで利用することのできる段階に来た時に、そうした指導をしている。(助言者)

○「火が燃える」のおどりぶりが火の燃える本質にあっていなかったのではないかと。また「じしゃく」のなにを表わすのかがばけていた。「じしゃく」の本質は、磁石によって動かされるという点に重点をおいて指導すべきであると思うがどうか。動きの種類が少なく、にっていたので1時間のうちでももっと指導した方がよい。また話し合いが多く、運動量はよかったのか。

(滋賀・東京)

○本時は、動きづくりの第1時であるから、まずこどもたちのものを充分出させ、それをもとに次時では、もっと発展させたり、深める指導をして高めていくのである。話し合いは、グループのみんながわかり合うために話し合いを多く

した。したがって次時はもっとつくることが中心になり運動量も多くなる。表わしたいことをもとに、全身を意識時につかうなら、決して運動量は不足ではないと思う。(岐阜)

○形のあるものから動きをつくるばかりでなく、低学年でも心象表現ができるのではないかと。

(岐阜)

○もちろん表現であるから、形や動きをやっている、そのものに対する感じや気持ちが背後にあることは当然である。しかし生活の中からとりあげた、テストなるテストに対する自分の気持ちそのものをとりあげ、それを身体表現していくということは、低学年は不可能であり、かなり高度な段階でなければ、表現できないのではないだろうか。(助言者)

○表現の評価は、どうあったらよいのか(岐阜)

○表現では、きめられたパターンがないので、評価が困難である。しかし先にのべた、三つの段階にそくして考えると、その段階つまり、感じを表わす段階でなる、「じしゃく」のもつ本質的な感じが表わされていないのではないわけである。この段階をさらにこまかなステップにわけると、そのステップが評価の総点になるわけだと思う。

○1年の9番の子の評価はどうか。(岐阜)

○ゴムの類のおもしろい感じを出していて、すばらしいと思う。(岐阜)

<ま と め>

○どこへいって授業をみても、上すべりだという感じがするが、岐阜では表現に対する真の姿をみつめて高めていこうとしている 研究は立派だ。

○いつもストーリーを追っていくのでは、ほんとうに表わしたいことが表わせないと思う。

はじめ、中心、終わりというのは、表わす順序でストーリーではない。

○授業について

1年

- ・犬を表わすことが多かったのは、犬を最後にみたらと身近ににいるからではないだろうか。

円盤は特徴がつかみにくいから、少人数になった。9番の子の表現は非常によかった。それは速度の変化やフレーズが自然に出てきているからである。

- ・おもちゃは1回だけ見せるのではなく、何回も動かしてみせ、えらぶ余裕を与えるとよかった。

3年

- ・「じしゃく」は動かないものであるだけに、やりにくかったと思う。形だけあって動きのないものを表現するのはやや無理がある。むしろ、鉄粉だけの動きを工夫させた方がよかった。

5年

- ・やや話し合いが多かったが、全身で動いてい

た。リズムをもっとやりたい。内容に合わせて動きになるようなリズムをつくらせることがたいせつである。また速さも考えるとよい。

＜全体について＞

全国約200校の抽出による調査の結果によるとリズム運動は、50%しか実施されていないといわれている。あとは他教科や他の領域にまわされている現状である。

今、問題になっている体力づくりから考えると体力は筋力、持久力ばかりでなく、神経系統の働きも重要なものである。そうした意味からもリズム運動の領域でうけもつものは大きい。

こうした現状をきりひらくためにも、岐阜県のような研究を今後もぜひすすめてほしい。

(講師)

日本体操協会
日本ウエイトリフティング協会
指定工場

営業品目
体操器械器具・陸上競技用品
重量挙げ用具・児童遊園器具
・球技施設・

Diamond

日本陸上競技連盟検定品製作
文部省規格教育用品製作

U.K. 上坂鉄工所

東京都墨田区本所4丁(622)目28番8号・電話東京8171・8172・8090

中 学 校 の 部

器 械 運 動

講 師 浅井浅一 (奈良女子大)

発表者 中野昭雄 (長良中)

授業者 堀 二光 (加納中)

研究員

前窪正夫 (加納中) 坪井孝雄 (大野中)

三宅保之 (大垣北中) 佐藤宏隆 (梅林中)

田辺之雄 (大垣南中) 大野幸夫 (島 中)

滝上一男 (白井中)

<発表要旨>

鉄棒運動のけ上がりを取りあげ運動の上達過程に即した指導過程の具体化を特に「できない」段階の指導を中心に発表。発表内容は、け上がりの指導計画とその展開を例に具体的なすがたの捉え方と指導のめど、「できない」段階で特にギャップの大きい運動については補助具による指導が効果的であることを実際指導の立場から報告された。

特に指導過程を具体化する場合、器械運動は性格上、導入の段階では、運動の不安定度を少なくしてやること。「どうにかできる」可能性を大きくしてやることに指導の重点をおくべきであることが強調された。次に研究討議の中で指摘された問題点について報告する。

問題1 「け上がり」の指導計画と展開に関する基本的な問題

- (1) け上がりの指導に用いた補助具の意図と与え方について。 (北海道・東京)

指導に用いた補助具の意図は、

- 「できない」段階であがる調子をわからせること (け上がりそのものをやらせる必要性)
○「けり」のあと、からだがバーからはなれてあがれなくなるギャップをうめるためのものとして、

- 指導のポイント (けりの方向とタイミング) を全体を行わせる中でわからせること。にあると考え、ここに重点をおいた補助として用いた。与え方については研究記要 (P 110・P114) を参照されたし。ただし、何でもかでも補助すべしということではなく、不安定な運動を全体として行なわせようとするときにその可能性を大きくしてやる手だてとして与えるべきだと考える。 (岐阜)

- (2) 足かけ上がり→け上がりと学習を発展させる指導をどう考えているか。(東京・大阪)
教材を発展的に指導すべきだという考え方については、器械運動では必要だと思うし賛成だ。しかし、例としてあげられた、足かけ上がり→け上がりという指導順序を構成する意図が、ただ単に技能内容が簡単→複雑という観点や、にているということであるとすれば意味がない。技能の発展系列を明確にとらえ、系列化したときに段階的指導として重要な意味をもつのであって、ひとつの運動からの発展、ひとつの運動への発展を明確にとらえることは現在の重要な課題である。ただ鉄棒運動では上がり方相互に発展関係がなさそうで、むしろ、け上がりは、そのもので指導すべきだろうと考える。 (岐阜)

- (3) 「できない」段階での指導は、そのつまづ

きと考えられるものを反復練習させることが必要だと考えるがどうか。(大阪・愛知)

つまづきをとりのぞく指導は必要である。唯方法に問題がある。つまづきとなる部分即ち、スイングができないから、スイングの練習をする。次に足首のひきつけができないからその練習をするといった順序で、け上がりの技能を分析的にとらえてそれらひとつひとつを抽出して、できるようにしても、け上がりはできない。即ち部分の総和以上のものが「できる」ためにはあるからであって、それを習得させるためには全体を行なわせる以外にない。部分を抽出して練習指導するのは、「どうにかできる」段階以後でおこなうべきである。ただし器械運動では、部分を抽出すること自体に問題(困難性)があり、むしろ全体を行なわせる中で、よりそのものを強調意識させ指導すべきだと考える。(岐阜)

- (4) 運動能力、体力の劣る生徒の指導をどう考えているか。(高知・北海道)

具体的に腕力、懸垂力、肥満児などの点で欠かがある生徒の取りあつかいということだが、け上がりの指導では、少なくとも、鉄棒にぶらさがって、からだ前後に振れる力があれば基底技能はそなわっているものと考え指導にあたるがそうでない場合はそこまで高めてやる必要がある。技能の高まりや定着度ではやはり一般の生徒より長い時間を要することにはなる。あくまで学習である以上可能性をわからせ努力する方向に指導すべきであろう。(岐阜)

- (5) 体力づくりと補助具の使用には矛盾があるのではないか。(北海道・千葉)

基本的には、体力づくりはその運動(技能)を獲得するなかでなされていくものと考えている。

したがって、器械運動といえども体力づくりを一義的にとらえた指導はなされるべきではないと

考えている。

体力づくりと補助具の問題は、補助具の果す割合が大きければ大きいほど体力づくりには貢献しないと思う。しかしまず大切なことは、「できない」段階では、その運動を「できる」ようにしてやることである。(岐阜)

＜公開授業について＞

公開授業として跳び箱運動の〔腕立て開脚水平跳び越し〕の授業が行なわれたが、授業を通して討議された問題について次に報告する。

問題2 腕立て開脚水平跳び越しの指導計画と展開に関する問題

- (1) 跳び越しのリズムを「ファン・ファン」ということでおさえられたが、かえって着手が不安定になるがどうか。また第一踏み切り、第二踏み切りは、慣れさせることで指導として十分なのか。(北海道)

「ファン・ファン」ということばでおさえるのではなく踏み切りのはいり方を軌跡によってわからせることに重点をおくべきと考える。唯感覚的にわからせる意味で使ったのであって着手のリズムをおさえないと危険がともなう。着手を安定させるには踏み切り板の距離の調節が重要であろう。

踏み切りの指導は、定着させるためには反復練習させることも効果的だろう。(岐阜)

- (2) 踏み切り足の振りあげ、踏み切り板の距離の明記を重視する必要があるか。

(北海道・東京)

踏み切り板の調節は重要である。足の振りあげよりむしろ、着手に問題がある。踏み切りよりも腕の使い方がおくれとはいけないことをわからせることが重要だろう。ただし踏み切りの有効角度は、はっきりおさえる必要がある。(岐阜)

問題3 学習指導上の具体的な問題

- (1) 服装についてどのような指導をしているのか。特にシューズの指導が徹底されていないようだが。(愛知)

学校全体として服装を同じもので統一する指導はしていないが、望ましいということで運動着の指導はしている。家庭的な問題もあって強制できない現状である。指摘された衛生上の問題については十分指導にあたらねばならないと反省している。(岐阜)

- (2) 準備運動の内容に走運動がなかったようだが準備運動を徒手体操のみで指導されているのか。(愛知・大阪・東京)

走運動をいれることは必要だと思う。はじめの準備運動としては行なわなかったが、前時の復習の跳び越し練習の中でおさえている。走だけを特にとりだして行なわせることはしていない。身体的動機づけが準備運動の中でおさえられていれば良いと考える。(岐阜)

準備運動は経験から教師が行なうべきものである。生徒の生命をあずかる教師としていかなる場合でも責任を負うべきで、その意味から指導なくてはいけない。(浅井)

- (3) 1時間の学習活動が運動量の点でひとりの生徒の運動時間が延2分間程度であったがその適否はどうか。(大阪)

ひとりの生徒の運動量についてはわからないが1時間の学習活動で中学生では20分～30分間ぐらいの活動時間が必要であると考え。生徒の満足感、疲労度の面からの検討も必要であると同時に技の定着度の面からの考察も必要であろう。

(岐阜)

- (4) 特異生徒の指導上配慮している点は、どんなものか。(高知)

たえず自信がもてるよう姿勢をつくり伸ばして

いくことが重要、個人的に課題をあたえ課外、家庭などで活動させること。とにかく高度なものを要求せず指導に当るべきであろう。(岐阜)

その他、グループ構成の問題(岐阜)、主教材と既習教材との組み合わせ方(大阪)、できない段階の生徒の学習評価(岐阜)、器械運動を生活化させる方途(北海道)、こわがる生徒の指導(北海道)、け上りの指導で「どうにかできる」段階までの指導のしかたをもっと具体的に(新潟)、腰が鉄棒からはなれることと腹筋力とは関連しないのか(千葉)、比較実験の結論づけで両者の実施時間数に問題がある(愛知)、等具体的な現場指導でたえず問題になることがらが多く提案され、研究討議がなされたが、時間的な制約があって十分究明するまでにいたらなかったため報告を省略させてもらう。

<講 評>

科学的に分析し、それを基盤に誰でも指導ができるという立場に立って指導過程の究明に当たったことは価値のあることだ。効果的な指導は「全体→部分」という指導の立場をとるべきだと確認しあえたようであるが研究の成果だと思う。ただし、全体のとらえ方を鉄棒運動を例で考えてみると「あがってから→おりるまで」を全体として考えるべきだと思う。

学習評価については、指導は評価の連続であり常に教師は評価段階をもつべきである。その点上達のすがたをより具体的、科学的にとらえたことは意義のあることだと思う。是非今後も継続究明してほしい。

学習展開については、まず生徒に運動そのものを直接経験(運動にうまくする)させる→それによって生まれてくる間接経験(どのような構えで運動すべきか)によって人間的な深まりが期待できるのである。したがって今後の課題は運動技能の指導を「学習」という立場で、間接経験を技能

の高まりに即応させ具体的な内容としていつ、どのように位置づけるかを究明してほしい。

陸上競技 (障害走を中心に)

講師 橋本正一 (岐阜大学)

助言者 長沢 弘 (岐阜大学)

発表者 芝山泰司 (島 中)

授業者 浅野 晃 (長良中)

研究員

足立利雄 (岐陽中) 小川 隆 (本荘中)
小沢 勇 (長森中) 桐山泰治 (本荘中)
駒田武久 (岐陽中) 清水 清 (梅林中)
杉山恒男 (那加中) 関谷洋永 (長森中)
鳥沢昭男 (加納中) 沼本芳郎 (明郷中)
林 博 (伊奈波中) 宮部隆雄 (岐北中)
安田勇雄 (穂積中) 高田 武 (加茂中部中)

<発表要旨>

○障害走の本質的技能

障害走は「走」を基底とした運動種目であるが短距離走と異なる点は規定の距離に並べられた障害を越さなければならない技能を含むことである。したがって障害をまたぎ越して走る一定のリズム (3歩のリズム) をいかに速くくりかえすかが本質的な技能である。

○指導の基本的立場とその具体化

「全体→部分」の路線に沿い、まず全体の調子をおぼえ部分技能を高め全体にかえす立場で、障害を低くしてインターバルを短かくし一定のリズムをかくとくさせ次に部分技能を高めながら正規の高さとインターバルに近づけていく。

○実証研究の方法と観点

○A型—一台のハードルの越し方をまずかくとくさせ遂次台数をふやし全体をまとめる。

○B型—低いハードル、短いインターバルで全体の調子をまずかくとくさせ部分をとり出して全体をさらにうまくする。

○観点—記録、フォーム、生徒の反省記録、指導者の観察記録 (思考、社会性) などの比較から結果を導き出す。

問題1 両型の指導過程の比較実験について

- (1) 実験におけるA型、B型に分けた根拠はなにか。 (愛知)
- (2) 実験におけるなまの記録の比較だけでなく他の科学的な方法 (データー) について実施する必要があると思う。もし行なわれていたら示して欲しい。 (愛知)
- (3) 実験各校の記録の比較について地域性による相違はなかったか。 (愛知)

<ま と め>

障害走の基底となるものは走であるというたてまえから両型のグルーピングは、走力 (50m走) の記録によって行ない、身長、体重といったものは加味しなかった。実験の記録による比較は発表した程度にとどめた。その理由は今回まず「走」を基底した過程と「障害」を基底とした過程についてどちらが優位性があるかを試みたものであって詳細なデーターはとらなかった。なお同じ考え方で高等学校部会でも実証研究した結果、質問されている詳細なデーターが示されているのでそれを参照されたい。また記録の結果においての5校の地域性による相違というものはみられなかった。 (岐阜)

- (4) 両型の実験の指導過程のうちB型は走を基底としているものであるから、当然4時間の学習においてA型よりそれだけ基礎体力である走力が養われる機会が当然多いので、結果においてB型がよいとはいいがたい。 (大阪)

<ま と め>

たしかに基礎体力として走力の増す度合がA型より大きいということは考えられるが、われわれは単にそれのみでB型がよいとは言っていないのであって、8mmによるフォームの比較、学習意欲の比較などからみてB型がすぐれているということを述べたい。(観点のウエイトを同等とした) (岐阜)

- (5) その意味で50m走の計測は第1時のみでなく第4時でもするべきではなかったか。(大阪)

<ま と め>

50m走の習熟は4時限の学習ではそんなに進歩はないという立場をとったが、たしかに参考までに測定すべきであったと、反省している。(岐阜)

問題2 発表の指導過程について

- (1) 発展の様相の「まとまる」と「リズムカル」とは障害走の場合一つにまとまるのではないか (大阪)
- (2) 「まず3歩のリズムをかくとくさせる」という考え方が、小～高～大学一般までに強調されているようだが、むしろ3歩のリズムは自然発生的に生み出すのであって当初は5歩でも、また4歩でもよいのではないか。最初から3歩に規制するのはおかしい。(大阪)

<ま と め>

様相の発展の「まとまる」というのは、姿フォームでとらえたものであり、「リズムカル」は動きでとらえたものである。(発展の基本は形から動きへ)したがってこれを一つに示すことには問題があると思う。(岐阜)

3歩と5歩のリズムの問題は、走が基底として考えられる以上、インターバルは5歩より最

初から3歩で走るべく規制することが必要と思う。もし3歩で走れなければインターバルを短かくして、3歩でいくべきである。したがって距離をどのくらいにするか、グループ所属をどこにするかが問題となろう。

(講師・愛知・岐阜)

問題3 学習指導計画及び指導の実際について

- (1) 障害走のみを4時間の学習で1時間中障害走を学習するということはどうか、その効率について (大阪・講師)

<ま と め>

一つの種目のみに終始するのはやはり問題である。種目の有機性を考えて、2～3の種目を行なうのがよい。時間的にも2倍3倍かけられることになる。殊に基礎体力に左右される陸上競技の特質からして同一種目のみ学習するのは問題がある。今回は実験のための計画で4時間を仕組んだが実際には2種目ぐらいを組合わせ学習している。(講師・岐阜)

- (2) 指導計画のように順次高さを変えていくハードルがない場合の指導のしかた、工夫は何かないか。(岐阜)
- (3) 女子の指導について特に高さへの不安感が感じられるがそれはどのように除去すべきか。(中央講師)
- (4) 能力に応じてハードルの台数に変化をもたせる方が望ましいと考えるがどうか。(大阪)

<ま と め>

指導過程にそったような高低自由なハードルがない場合は、走り高跳びのスタンドや椅子の利用などが考えられる。(大阪)

ハードルとスタンド利用では潜在的に何か異った意識をもっているのではよりかんたんな木材を使った簡易ハードルをなんとか作製すべき

ではないかと思う。意識の問題はかなり重要である。
(岐阜)

女子の障害走の指導では不安感は当然だから
(男子とくらべ)岐阜が示した方法などはその点
からいっても効果があるのではないか(岐阜)

能力差に応じて台数、インターバルにもっと
変化をもたせることを考慮すべきであろう。

(多くのグループをつくる) (講師)

- (5) 体育時に於ける思考過程、具体的には話し合
いの場を、運動量とのかみ合せでどのように考
えるのが望ましいか。今日の場合、運動量が少
ないと思う。(大阪・岐阜)

<ま と め>

社会性の面を培う意味から話し合いによる知
的理解の深まりは大切であるが本来の運動その
ものがなされずに終ってはいけない。要は個人
スポーツなどの種目は特にこの点考慮すべきで
あるが、話し合いの内容の焦点づけ、ねうちを
グループでどう把握させるか、おさえるべき点
は活動の中でできるだけおさえ問題発見、思考
の場とすることが大切であろう。その意味から
して具体例として本日の授業などは時間的には
妥当ではなかったか。(講師・愛知・岐阜)

問題4 基礎体力をいかにしてつくるかをもとに して一般にいう体力づくりについて

- (1) ハードルの高さが低い場合はよいが、次第に
高くなるととびあがってしまったりフォームが
くずれたりするがこれは調整力、走力、巧徴性
を中心とした基礎的体力、運動能力が不足して
いると考えるこの解決についてどうするか。

(石川)

- (2) 授業を通して体力づくりということは当然考
えねばなるまい。指導要領の改訂に伴い昨今こ
の問題が非常に浮び上がってきているがどう考
えたらよいだろうか。(講師)

<ま と め>

障害走を例にとれば敏捷性、持久力よりも筋
力の面が多く使われるから筋力の育成は負荷を
かけるより回復をまっけてから行なうことが望ま
しい。まずこの点を考慮したい。こうした立場
で技能の指導を主として養われる基礎体力につ
いては前もってよく研究しておくべきであって
種目による片よりは充分配慮しておく要があ
る。(助言者)

クラブの指導とは異なるが軽いサーキット
レーニングを授業中、または授業前に行なって
基礎体力を高めている。(岐阜)

体力を高める場面として例えば単位時間でも
必要だが生活全般の中に必要であると思う。こ
の考えに立って時間増加の問題、クラブの位置
を必ず一日の日課として位置づける。(特設体
育時間) 領域として体力づくりの場面をハッキ
リ示すなどが考えられようが現場でもよく検討
されたい。(講師)

体力づくりは本来、その教材の中で位置づけ
られ行なわれるのが望ましい。所謂、補強運動
的考えである。したがって全然孤立化した位置
づけというのは問題があろう。あくまで教材と
立体化し構成されなければならない。その意味
で現場での実証、発達段階の考慮などが必然的
に要求されよう。(講師)

時間数の増加の問題、体育の振興による予算
の問題、到達基準と内面化の知的理解の深まり
など体力づくりとの関連は多くの問題点がある
ように思う。(愛知)

以上この問題についてはかなり時間をかけて
討議を深めたが、大方の一致した考え方は講師
の発言の内容にあるように思われた。

バスケットボール (球技)

講師 鈴木正三 (学習院大)

助言者 市島憲郎 (岐阜大学)

発表者 小沼亮一 (付属中)

授業者 板津三郎 (岐北中)

研究員

秋松 武 (笠原中) 高杉 仁 (梅林中)

篠田和幸 (長森中) 安池重彬 (本荘中)

岩田正彦 (中部中) 安田恭三 (東 中)

山田左門 (伊自良中) 大野寿夫 (藍川中)

浅野 忍 (真正中) 丸山征夫 (長良中)

大会の日程

第一日目 午前 県全体発表

午後 中学校全体発表と分科会発表

第二日目 午前 公開授業と授業研究

午後 分科会で研究協議

発表の要旨

○バスケットボールのゲームの様相を「攻防の人の動き」でとらえ、初心者から熟練者までの発達のすがたを図表に現わした。

○とらえた様相を「熟練の過程」と「指導の順序 (全体→部分)」の原則にあてはめ、中学校におけるバスケットボールの基本的指導過程を構成した。

○基本的指導過程に基づいて、各学年の指導計画を作成した。

○1年の指導は、ゲームに中心をおき様相の変化発展をたどりながら、素朴な「分極攻防」のすがたをめどにする。

○2年の指導は、攻めのうちでも速攻に重点をおく。守りではゾーンディフェンスをおさえる。めどは1年と同じく「分極攻防」であるが、1年にくらべ質的なたかまりが見られる。

○3年の指導は、最初に攻めに重点、次に守りに

重点、最後にコンビネーションによる攻防と三段階になる。最終の様相は「分極攻防」である。

公開授業

対象 1 年男子、本時の位置、15時中の11時間目
本時のねらい、「サイドを使って早く攻めよう」
(速攻のはしり)

研究協議

第一日の発表に対する質問、第二日の公開授業に対する意見及び研究協議の内容を問題別にまとめて報告したい。

問題1 技能指導に関するもの

① ゲームを成立させるに必要な最底の技能とはなにか。 (熊本)

○岐阜では「基底技能」ということばで呼んでいるが、ボールを投げる、うける、つくという技能を指している。小学校のうちにドッチボールやポートボールでこれらの技能は十分習得されているので、中学校では最初からゲームを行なってもさしつかえない。ただし、女子には多少補強してやる必要がある。 (岐阜)

○小学校の経験だけではどうも不十分なような気がする。 (熊本)

② 練習の方法にリードアップゲームがとり入れてないのはなぜか。 (愛知)

○リードアップゲームの考え方をまず明らかにしておかねばならない。岐阜ではバスケットボールのリードアップゲームはポートボールだと考えている。だから、例えばパス練習をゲーム化して行なうやり方はリードアップゲームとは言っていない。 (岐阜)

○「基礎→応用→ゲーム」という指導の順序をたどるときのリードアップゲームと、岐阜県のやり方の場合とは当然違ったものになる。岐阜県のやり方はリードアップゲームではなくて、バスケットボールのゲームそのものである。しか

し、現在の最高のゲームはとてもできないから、簡易なゲームをやらせるのである。中学校の段階では簡易さを少なくしていくのである。

(助言者)

- ③ 能力差(技能の)のある生徒はどのように配慮しているか。(広島)

○グループ編成するときは、もちろんうまい生徒ばかり集まらないよう異質グループをつくっている。そのグループでお互いにうまくなっている。という仲間の関係を醸成するよう努力している。なぜなら、集団の支えがなければうまくないから。教師も個別指導をする。生徒にも「自分はどうすべきか」を考えさせる。へただから積極的に参加するのだという気持ちをもたせることが大切だと思う。(岐阜)

- ④ 公開授業で、ゲーム中コートのもん中をドリブルで進んだ生徒がいたら教師はその生徒に「君はドリブルが多い」といっていたが、あの場合のドリブルは適正ではないか。(滋賀)

○1年生では、ワンマンプレイヤーが生れる可能性が多い。特にクラブの生徒などはそうなりやすい。ゲームはみんなでやるのだということは1年の中に体得させねばならない。きょうのあのグループは「パスを早くまわそう」という約束をしていた。だからドリブルをとめた。たしかにチャンスとしてはドリブルで進むべき場面であったと思う。(岐阜)

○生徒自身気がつくまでまつというのではなく、おさえるべきところは教師がしっかりおさえることは大切だと思う。(愛知)

- ⑤ 様相を追って指導するということはよくわかる。私達もそうしている。が例えば「それらしくできる」までをめどとしたら、早く到達できるように指導してやるのが教師ではないか。

(愛知)

○教師がゲームそのものにはよく注意しているようであるが、もっと次の様相へ移れるよう指導

した方がよい。

(講師)

○様相の発展に即した指導をする場合、最も注意しなければならないのは、教師が様相の発展を急いで追うあまり、十分その段階が充実しないままに終るということである。その段階を十分充実するところに新しい矛盾が生れ、発展するのであるから無理に引き上げることはかえって失敗する。(岐阜)

○では、「ボールをもらう人はいい場所へ広がる」という指導の場合、どのように指導するのか。(愛知)

○よい場所とはどういう場所かをつかませ、そこへ動くように意識させる。この場合、ボール処理が悪いと動きとマッチしないので、ボールの受け方、投げ方を考えさせることも必要である。しかし、パスやキャッチの練習を特別取り上げることはしない。(岐阜)

- ⑥ 1年生にゾーンディフェンスを指導するか。(滋賀)

○1年では指導しない。(岐阜)

○公開授業を見ると生徒たちはすでにゾーンディフェンスのことを問題にしている。今、指導すべきでないか。(滋賀)

○いまの段階はまだ「攻め」に重点をおくべきだと考えている。もしゾーンを教えれば守りが固まるので一時攻めが停滞する。そうなるとせっかくつかんできた「早く攻める」タイミング、リズムを十分つかまないで終わってしまう。

(岐阜)

○ゾーンとマンツーマンとどちらを先に指導するか。(滋賀)

○ゾーンだ。(岐阜)

○なぜゾーンか、マンツーマンの方が先だと思うが。(滋賀)

○2つの理由からゾーンを先に教えている。その1つは、様相からしても生徒の意識からしてもゾーンが先に現われるということである。もう

1つの理由は、みんなで守るという協力関係がとりやすいことである。また、ゾーンを先に教えると速攻が出やすいという有利さもあり、守りから攻めへの変化をつかみやすい。(岐阜)

- ⑦ 抽出練習を行なう場合、守りをつけて行なった方がよいのではないか。(滋賀)

○1年生の段階では抽出練習はしない。しかし、授業のはじめに生徒を使って動き方を示すことはある。抽出練習は2年から取り入れてある。この場合、守りをつけて練習する方法と守りをつけないで行なうのと二通りある。くわしくは紀要を見てほしい。(岐阜)

問題2 女子の指導について

- ① 中学女子の指導はどうしているか。(千葉)
- 発展のしかたは男子と同じであるが、進歩の速度がおそい。1年で3～4時間、3年で5時間くらいの差が見られる。女子を対象にした実証研究をまだ十分行っていないのではっきりしたことは言えないが、男子とは多少違った指導のしかたをしなければいけないと考えている。(岐阜)

- ② 生徒はゲームが面白いのではないか。だから、部分練習には意欲的に参加しないのではないか。女子は特にそのことがいえないか。(千葉)

○ゲームを遊びと思わせるような指導はいけない。部分練習はもっとうまくなるためには、このことを練習しなければいけないのだ。という必要感をもたせなければいけない。また、そのチーム(集団)が、おたがいにはげまし合っとうまくなろうという支え合いのあるチームでなければいけない。そうした意味で集団づくりは大切なことと考える。(岐阜)

問題3 基礎体力に関して

- ① 基礎体力をどのようにしてつけているか。

(大阪)

○まず、岐阜県がこの発表でいっている基礎体力というのは、技能の上達という立場から考えて位置づけているものである。すなわち、「全体→部分」という方向の中で、高度な段階では基礎的体力の向上をはからねば技能そのものも上達しないという考え方である。しかし、中学校の段階では体力づくりは必要でない、というのではない。研究的にはとりくんでいないが、体力づくりを特別の方法でやらなくても、スポーツ運動を身につけていくプロセスで体力づくりも行なわれるという考え方をしている。

(岐阜)

○中学校の段階でも、体力そのものが向上すれば技能も高まるだろう。しかし、限られた時間の中でいくつもの運動を習得させるという場合、岐阜県のようなやり方がよいのではないか。

(助言者)

問題4 年間計画について

- ① 年間計画の中で種目配当するとき、他の種目との関係はどうか。(広島)

○実証研究を行なう段階では他の種目との関連や行事(校内大会)との関係でうまくいかなかったこともあるが、1、2、3年の指導計画が大体でき上がった現在では、そういった問題はあまりない。(岐阜)

○バレーボールやバスケットボール、或いは陸上などは、その教材の終り頃に校内大会の行事を位置づけることが望ましい。(各県)

問題5 授業について

- ① 1チームのゲーム時間が前後半合計して14分というのは短くないか。それでは生徒が満足感を得ないのではないか。(広島)

○1コートで4チームで使用する場合、このくらいの時間が普通だろうと思う。生徒は満足して

いるようだ。運動量も適当だと思う。(岐阜)

- ② ゲームを行っていない生徒の指導はどのよう
にしているか。(愛知・広島)

○内容的には三つのことがある。1つは反省をし
たり作戦を考えたりお互いに批判し合ったり
する話し合い。2つには、他のチームの試合を
見て学習する。3つには、練習をする。このう
ちのどれに重点をおくかは、その時何が一番問
題なのか、ということで違ってくる。例えば、
1年生の最初の段階では、どう動いたらいいか
という「いい場所」は、観戦することによって
よくわかるので、ゲームを行っていないチ
ームには具体的な観点を持たせて観戦させて
いる。(岐阜)

- ③ 各学年とも指導計画をみると、終りの3時間
位はトーナメントで試合を行なうようになって
いるが、その理由は。(静岡)

○それまでのゲームは、いわば「練習ゲーム」と
いったものである。それで3年生の段階では、
守るときは必ずマンツーマンで、というように
約束してゲームを行なうことがある。最後のト
ーナメントはそれまで学習したことの全てを
出し切るという意味できびしきを持たせた。

(岐阜)

- ④ グループの反省をどのように残しているか。
(滋賀)

○1人に一冊ずつノートを持たせ、その時間のね
らい、学習したこと、感想を書かせている。学
校によっては教師がバスケット用の特別のノ
ートを作って使用させている。(岐阜)

問題6 ルールについて

- ① ルールはどの程度おさえてあるか。(新潟)

○バスケットボールの本質を現わしているもの、
そのルールをなくするとバスケットボールでは
なくなるようなものは最初からとりあげておさ
えている。キャリングボール、ダブルドリブ

ル、パーソナルファウルなどがそれである。し
かしきびしきはゆるめている。3秒ルールは3
年でとり入れている。(岐阜)

○公開授業を見た感じではファウルが少しきびし
かったのではないか。(新潟)

○そう思う。(授業者)

○ファウルをあまりきびしくすると、伸び伸びし
た子どもらしいゲームでなくなる。きょうの授
業はその感じが少しあった。(助言者)

問題7 集団行動について

- ① 集団行動についてどう考えているか。

○集団行動を指導する責任は体育にあるという考
えには反対である。体育は集団行動の下請けを
行なっているのではないから。

基本的には、学習場面をしくむ、無駄な行動
をなくするという考えで、並び方、話し合いの
場所、形などを指導している。(岐阜)

問題8 評価について

- ① 評価はどのように行なっているか。(新潟)

○評価に関しては研究中で現在の段階でははっき
り言えるものをもっていない。が、今までよく
行なわれたドリブルのし方とか、30秒で何本シ
ョットしたかなどということで評価はしたくな
いと考えている。ゲーム中の動きとか、ゲーム
の中でのボール処理とか、他の人との関係でプ
レイがうまくできるかといった観点で評価した
いと考えている。(岐阜)

○体育の問題は技能だけでなく、社会的態度、健
康、安全といった問題も並行して研究しなければ
ならない。社会的態度に関する研究は手がけ
られているが、評価に関する研究は全くといっ
ていいほど手がけられていない。今後に残され
る大きな問題である。(助言者)

バレーボール (球技)

助言者 村田 尚 (県教委)

発表者 船戸正美 (島 中)

授業者 松浦 潔 (長良中)

研究員

今井澄夫 (岐陽中) 金武孝雄 (鶴沼中)

杉山秋夫 (美山北中) 高橋義治 (北方中)

藤井康弘 (加納中) 山口正治 (三輪中)

山田 巽 (高富中)

ネットを狭くでの「対峙戦」の性格をもつバレーボールと、初歩から熟練に至る基本の姿を、ボールラリーに本質があるという立場から、ボールの「やり合い」でとらえ、熟練過程を「つき合い」「返し合い」「送り合い」「打ち合い」のゲームの様相の発達で把握した。この様相に対応して技能指導の「めど」と「技能内容」を位置づけ、指導過程を導いたことの道すじと、具体的な各学年の指導計画を発表。それに基づく研究授業についての討議研究の要旨は次のようである。

問題1 指導計画に関すること

① ポジションの固定化についてどう考えるか。

(神奈川・山梨・山形・熊本・千葉・愛知)

○九人制の場合は、ローテーションとは考えないで、位置の交代として適当なポジションを探す意味であって本来のローテーションではない。固定ポジションは九人制の宿命である。ただ低次な段階では移動するのがよいが技能の高まりに従って固定の方向へむかうのではないか。それは、ポジションの適性に合わせてバレーボール集団の技能を高めることが九人制指導の教育になるからである。(岐阜)

○教育ということから言えば、体力づくり、人間づくりをめざすから運動量も同じようになる指

導が必要。技能面はその次で、バレーボールはその手がかりといえる。(熊本)

○強くすることと、教育することは、イコールでなければならない。イコールにならないならば教材が不適當といえる。教育的見地から、九人制より六人制をとり入れるのがよい。(岐阜)

——賛成多数——

② 女子の指導計画についてはどうか。

(三重・静岡)

○女子については実証していないが、男子と同じ計画で内容を指導している。但し、指導のめどは男子と同じ段階ではあるが、質的に浅いという把えかたをしている。また、女子の技能程度は男子より低いので、引っぱりあげる配慮が必要になる。(岐阜)

○女子は三年になると動きが鈍くなるので、小学校六年、中学一二年に重点をおくとよいのではないか。(神奈川)

○一二年に同じ練習をやらせたが一年も二年の段階まで到達した。(山梨)

○小学校の高学年から、十分できる能力があることを立証しているところもある。しかし、問題は、現在の生徒のもっているもののなかから、一つのパターンを把えて発展的に高める指導が必要である。(岐阜)

③ 発表された指導過程は正課とクラブに共通するか。(神奈川)

○指導にあたって、根底を流れる原則は同じである。クラブでは深く高く、「コンビで打つ」ところまでいかせたい。そのためにも、のぞましい姿として、チームを二つもち、ゲームをやりながら部分練習をするのが、つよくなるやりかたでないか。この場合、弱い部分の練習が多くなることは考えられる。(岐阜)

○三段攻撃の練習は、全体で行なうといわれるが個人技術や連絡動作は、どのようにおさえるのか。(神奈川)

○ゲームのなかで、ゆきづまりがでてきたら、その基本練習をやり、再びゲームへ返す（岐阜）

問題2 社会性指導に関すること

① 社会性を培うための指導をどのように考えているか。（千葉）

○技能が根本であるから、技能構造、指導過程がはっきりしてから構造化をはかるが、具体的に指導の場面では、ルール、約束に対する内容、協力して練習ができる態度、係、ポジションをやりとげる態度などがあるが、直接場面では指導の限界がある。それ故、方向づけ、意識づけが必要である。練習する場面では、技能を習得することを媒介にして指導し、勝敗に対する公正な態度については、ゲームの中でというように場面によって気づかせ、指導している。

（岐阜）

○いたわる、励ますだけでなく、個人技能を高めることがチームへの貢献であるというように気づかせることが社会性を養い、技能も高める。

（山形）

○技能を向上させてやることは、問題行動を少なくするという相即性があるが、これについての実証的なものはないので、位置づけはできない。

（岐阜）

○指導過程が未研究の現在でも当然この点は考えるべきで、どの時間でも配慮すべきではないか。

（熊本）

○当然ではあるが、社会性を強調するあまり、個性を埋没させるようなことが、しばしばあるがこれは問題である。

（岐阜）

○今日の授業では、その点はうまくいっていた。この社会性を養うについては、その場面を構成することが必要である。

（神奈川）

○場面構成は社会的学習という立場から考えると技能学習よりも大切である。従って、場面構成をして、そのなかで価値のある内容を指導すべ

きだ。しかし、本県では、そこまで研究が進んでいない。（岐阜）

問題3 施設、用具に関すること

① ボールの大きさについてどう考えるか。

（千葉）

○学年によってボールの大きさをかえて低学年であれば軽いものを使うのがよいのではないか。

（熊本）

○組手パス、レシーブでは4号ボールの方がよいが、女子については研究中である。大きさ、重さとそれに硬さ（気圧）が問題であろう。

（神奈川）

○4号ボールを使っているが一年女子ではやや問題がある。男子の3号は、生徒は好まない。ボールの硬さは、技能の高いものは硬いものを好む傾向がある。

（岐阜）

② 人数に対するコートの広さは、どれ位が適当か。

（山梨）

○技能の低い段階では狭いコートがよいのではないか。

（愛知）

○学年毎にコートの広さを特別考慮はしていない。低次な段階は、生徒の意識はコートよりもボールにあり、余り関係がない。ラリーが続くことは技能の上達の程度によるが、一年では現行のルールよりコートもやや狭くし、ネットも下げることを考慮しているが、妥当な線は結論がでていない。そのときの技能段階に応じて考えるのがよい。

（岐阜）

③ 部分練習でネットの高さを低くしてやれば短身者も、打つ感じがよくとられられるのではないか。

（熊本）

○教育的立場から、身長に応じたネットの高さを考え（一年では180cm）同じようにキルの練習をさせるのがよい。それが機会均等といえる。それには、チーム編成を身長別にするとよい。三段階に、グループも、コートも用意してやっ

ている。(愛知)

- 同じキルの練習でも、実際のゲームで生きる技能という観点から、ネットの高さは学年では同じにすべきである。同じ条件のなかで、それに応じたキルの打ちかたを体得させることが大切である。そして、全体としての技能を高める指導が教育的である。(岐阜)

問題4 技能に関すること

- ① パスをどのように指導するとよいか。

(新潟・千葉・熊本・三重・兵庫・神奈川)

- 円陣パスより、対人パスを多くして、少しでもボールにふれる回数を多くした方がよい。

(新潟)

- 対人パスは、一年では興味が少なく持続性が無い。

(熊本)

- 一年生で円陣パスと対人パスの実験(三時間)をした結果、スキルの面で差がみられなかった。最初は、興味をもち、持続性のある円陣パスがよいのではないか。そのなかで、はじく感覚を体得させる。しかし実際には、形でしか指導できないが、形にこだわって、かえって技能の上達を阻害することに留意したい。個性を殺すことになるからだ。形で教えるがそれは原則でしかない。

(岐阜)

- 円陣パスのラリーが多く続いても、ボールにふれないものもあるし、このラリーは、ゲームのラリー回数には結びつかない。それで対人パスも重要である。

(山形)

- 同感、岐阜の指導計画では、円陣パスが中心であって、扇形、対人パスも必要としている。

(岐阜)

- 平手アンダーパスからと、組手アンダーパスの両方から入る方法があるが、どちらがよいか。

(熊本)

- 平手アンダーから、組み手アンダーへの移行の指導には困難点がある。また、現在、指導要領

にはあっても、一般に通じないプレーは指導すべきでない。むしろ、改めるべきである。

(岐阜)

——一同、同感——

- ② タッチについてどう考えるか。(千葉)

- 現行指導要領のタッチについて、その段階に於いて指導していきたい。打ち方については、ジャンプのタイミング、手のスイング、握りなども指導する。

(岐阜)

- ③ サーブの指導についてどう考えるか(三重)

- サーブは9人制では公平に与えられた攻撃手段であるから、強いサーブを打てるようにするのがよい。

(千葉)

- 授業では、サーブが強すぎるとゲームにならないから、一本にしてラリーが続くように配慮した。サーブがうまく入らない場合は、特別に練習する必要がある。うちかたなどは指導する。

(岐阜)

- ④ ルール、審判のやりかたの指導についてはどうか。

(栃木)

- ルールは一年のときに教える。パスの段階ではドリブル、ホールディング、その他は、ゲームの発達段階に照応しておさえていく。その程度は、三年になるにつれ正規のきびしさに近づけていく。審判については、その学年の発達段階に応じた審判法を指導するが、程度はこれなら生徒が守れるだろうというところを生徒と話しあってきめる。審判は、原則として生徒にやらせ、全員がゲームに参加するたてまえがのぞましい。実際には、各学年とも、指導計画最終のトーナメント戦で指導している。

(岐阜)

——栃木・愛知・熊本も同じ——

問題5 その他

- ① ゲーム指導のなかでの評価をどのようにするか。

(静岡)

- 教師の評価については、とりだした部分について

てのみでなく、ゲームのなかでの生徒の動きについても評価すべきである。評価の観点は、個人がどのようにのびたかも必要だが、個々のもっている力をどのようにゲームに生かしているかをみたい。例えば、ゲーム場面では、結合の動きはいいか、どれだけ相手を考えてやっているか、どれだけリズムをつくろうと努力しているか、などである。実際には、①パスとサーブ、②最後のトーナメント戦の場面で評価している。(岐阜)

〔研究大会に対する意見〕岐阜へよせる。

○基礎体力とバレーボール技能の関係を明らかにできないか。(愛知)

○生徒の自主的活動と技能内容の充実に感銘、五人制でも、ひとりひとりが均等な運動量のある授業構造は考えられないか。(熊本)

○女子の授業もぜひみせてほしかった。女子の指導計画の研究を待っている。(神奈川)

○実証的で綿密な研究ができ、授業にその成果があらわれている。(滋賀)

＜ま と め＞

○技能習得の基本原則を基盤にして、実証研究により導き出された新しい指導計画については、各県の会員相互の討議のなかで、その道すじは適切ではないか、との志向性がみられた。特筆すべきは終始、現場の指導と密着させながら、疑問点や実践結果を出しあうなかで、熱心に活潑な討議がなされたことである。この各県の会員の前向きの構えによって、実のある会になった。討議のなかで残されたいいくつかの問題は、今後同じ現場の仲間の悩みとして、広く、会員の手のたずさえ合いによって、よりたしかな指導計画がつくられていくことを期待しあって、この分科会は閉じられた。

サ ッ カ ー

助言者 宮本幸好 (県教委)

発表者 荒川正義 (川島中)

授業者 尾関 巖 (高富中)

研究員

山下 剛司 (本荘中) 渡辺名美夫 (陶都中)

吉田 重弘 (興文中) 堀部 哲司 (小泉中)

志津野克己 (長良中) 柳瀬 茂信 (江東中)

問題1 様相の発展にもとづく技能指導について

○ゲームを中心として進める場合、かたまるへ広がる、に至るまでにどんな具体的な指導がなされたか。(千葉、新潟)

a 初期の段階において生徒の意識は、ただ「けりたい」ということからボールに集中する。この段階では当然広がらせる指導が必要になり、そのためには「なぜかたまるか」を考えさせ、かたまることが攻めたり、守ったりするのに不利だということを体験させ、指導として、パスを受け易い、いい場所へ動くとか、いい場所の味方に早くボールをわたすといった動き方の指導からなされていくわけである。(岐阜)

b aの動き方の指導によって生徒の意識は「かたまるな」へと発展し、縦に広がるきっかけをつくっていく、この段階では、役割分担によって攻め役、守り役といったポジションを意識させる方向へ指導する。(岐阜)

c 広がりへの指導としてハーフやウイングの指導が大切だと思うが。(福井、大阪)

役割に関する指導の中では、動きとしてはキック力もでき、ボールの動きが縦に多くなる。ここでの目的は横への広がりであるから、特に横パス指導が重点になり、動きとして、ボールのある逆サイドからの攻めや守りを指導し、このことが味方にとって有利であることをウイン

ゲやハーフの動きを通してわからせる。

以上のような指導によって広がりへの指導を試みた。
(岐阜)

問題2 部分技能の指導について

○1時間の中で、前半の部分練習が後半のゲームに生かされることが必要であるが、どのようにそれを位置づけているのか。
(大阪)

初期の段階においては、特に部分を抽出しての練習はしない。最初から、サッカーのゲームそのものを行わせることによって、ゲームのおこない方(サッカーそのものの調子)を体得させることに重点をおく。

○ゲーム中心だと基本技能がおろそかになるのではないか。

教師の視点は、そのゲームの発展ぶり(ゲームの姿)におく。初期の段階において、ドリブルや、1:1の練習をしても、ゲームの場に生かされない。ゲームの場では予期しない事態の連続であるからどんな場合にどんなキックを、どんなときにドリブルをしなければならないかは基本練習では体得できない。しかしボールなれという意味で、準備運動などでけり合わせることは考えなければならない。

○基本の応用練習は、いつ、どのように位置づけて指導するのか。

部分練習の目的は、その時点でのゲーム内容を効果的に高めてやることにあるのだから、部分を抽出して練習することに効果があると認めた場合にそれをおこなうことを原則とする。従って、ゲームの様相に照応した抽出練習が考えられる。ゲームからかけ離れた、必要性を感じない練習は意味がないと考える。また抽出のしかたは、よりゲームに近い、大きい部分から小さい部分へととり出して練習させることが必要であると考える。

『サッカーをおこなうための最低必要な技能

(キック力など)は当然最初に補ってやることは必要である。』
(岐阜)

問題3 技能の発展にともなうルールの位置づけについて

○技能の発展とルールの位置づけはどのようにしたらよいか。
(福井、大阪)

ルールはゲームそのものを進めていく約束とかゲーム上の危険防止などの面を考え決める必要がある。だから、うまくなるにつれて簡易なルールから正規のルールへと近づけてやる必要がある。

岐阜の場合、キックオフ、スローイン、ゴールキック、コーナーキック、ハンドリング、危険なチャージ、フリーキック、ゴールキーパーのボール処理法、以上を最初の約束として与えた。

小学校での経験によっても異なるが、原則的には最低、ゲームが成立する必要なルール(ゲームの進行と安全面)を与えればよいと考える。

○スローインを片手でおこなわせるのはどうか。
(広がりを求めるために)
(千葉)

片手でスローしてもよいが、両手と片手ではギャップがありすぎ、スローインがきわめて有利になる。(片手から両手になったことは歴史的にも意味がある)最初から両手指導のほうがよいのではないか。更に福井から出された、ゴロでスローインするのは、小学校での経験や、現在のゲームぶりから考えて必要がないのではないか。
(岐阜)

○ゲームで得点できず、生徒の興味がなくなるとなれば、ゴールを大きくしてはどうか(福井)

サッカーでは、ゴールインしなくても生徒はよるこんでゲームをする。かりに大きくしても、ゴールインの数はそんなに変わらないと思われる。むしろボールを進めるための動きを指導することのほうが大切ではなからうか、大きく

することは決して悪くはないが…… (岐阜)
○オフサイドをどのように扱ったらよいか。

(大阪)

ゲームの発展ぶりから、3年生で与えるのが
適当ではなかろうか、2～1年では、オフサイ
ドの位置にいる生徒に対しては、ボールの受け
易い位置へ移動させるような指導がよいと思
う。(岐阜)

問題4 運動用具と施設について

実験研究で扱ったボールは、男子バレーボール
と同じ大きさで軽いものを使ったのが効果的であ
った。(岐阜)

○実験研究のグループは色別で編成したのか。

(千葉)

互に相手が見易い点もあって色別の番号入り
のゼッケンを使用した。

○グラウンドが狭い場合の指導はどうしたらよ
いか。(山梨)

極端に狭い場合は、サッカーらしいゲームを
望むことはむずかしいのではないか、やむを得
ない場合もあるが、もし、バレーボールコート
やバスケットゴールが同じ場所にある場合は支
柱に充分注意しておこなう必要がある。

(岐阜)

問題5 授業における指導助言その他について

※(充分な時間がないため問題点として討議で
きないで残された内容)

○授業におけるゲーム指導と、その裏にあるグ
ループでの練習や話し合いをより効果的に指導す
るために、教師として、はっきりしたねらいや
計画が必要ではないか。

○練習内容は、ゲームに直結する有効なもので
なければならない。

○ゲーム中における、ストップ指導や、「走れ」
「うて」「相手を見よ」等々、助言指導のあり

方について。

○体育指導における安全面、社会性の問題をど
のように考えたらよいのか。

以上、残されたまま会を閉じることになった。

<おわりに>

新しい指導過程を求めて、実証研究の発表がな
されてきたが、時間不足のために、十分深め合う
ことのできないままに、しかも、いくたの問題点
をも残し、本研究大会を終ることは大変残念であ
る。しかし、全国のおおぜいの研究の同士によっ
て、本大会で発表されてきた、基本的指導過程に
基づく各種目の実証的研究に対し、ますます深め
られ、相互批判していく中で、より本質に迫る適
切な指導過程を築きあげていけるものなら、どん
なにかすばらしいことかと、願っている次第であ
る。

ダ ン ス (表現)

講 師 松本千代栄 (教育大)

助言者 中西 泉 (岐 大)

発表者 河内義子 (長良中)

授業者 同 上

研究員

小沼 亮一 (付属中) 小島美代子 (梅林中)

関 敏子 (大垣北中) 青木ゆき子 (本荘中)

松波 久子 (長森中) 沢木志づ子 (加納中)

尾山多恵子 (岐北中)

<発表要旨>

指導過程確立にあたって、特に今回は指導の大
すじをつかむことに重点をおいて研究を進めた。

そのためには、まず「表現のとらえ方」をはっ
きりさせ、「表現でねらうこと」を明確にした上
で、そのこと(本質)を最大限に生かした指導を
考える、という研究の方向をとった。すなわち表

現においては、「踊りをつくる」ことを最も重要視し、踊りをつくることと踊りを踊ることとは一体的なものである、という立場をとった。

そして、つくりだされる「動き」の基底となるのは「表わしたいこと」であるから、この「表わしたいこと」を追求することで「踊り」もつくりだされ更に発展もしていくのだと考え、このことを実践において確かめながらすじみちをたててみた。

その結果、「テーマの追求」は「動きの追求」であるということを実践でつかみ、「テーマの追求」ですじを通した表現指導（指導過程）の構成をしたのが本研究の内容である。（紀要参照）

研究の結果は、生徒のすがたからすれば本質をとらえた指導であると判断しているが、現段階においては各段階の技能内容を明確にとらえることはできなかった。（問題点）

＜第1日＞（発表に対する質問を中心に）

- (1) 伴奏音楽をどう考えるか。（福井、岐阜）
「つくりだす」ことが本質であるから、低次な段階においても「つくる」という全体をふまえた指導をしなければならない。したがって伴奏も「表わしたいこと」がより表われるようなのを当然つくりださせるべきであると考えた。

音楽を先に与えることは、動きを規制することになるので好ましくないと思う。現在ではあつかいやすいという点でタンバリンを与えているが、無伴奏でつくる子もいる。

- (2) スケッチはどういう目的でやるか。（群馬）
「ああ、こうしてつくるんだなあ」ということをつかませるのが第1の目的である。そのほかいろいろ動くうちに自分の「やりたいこと」をさがしだし、動きにもなれてはくさしさがのぞかれ、作品づくりにスムーズに入らせるための効果がある。

- (3) 作品が模倣的、ゼスチャー的である。

どんな姿をさして「表現としてよい」というのかは、表現をどうとらえ、なにを大切に指導するかによって決められると思う。このままで将来もよいとは思わないが、特に1年生では具体的な表わし方でよいから自分たちでつくりだし、気持ちを十分こめて踊ることができればよいと思う。

- (4) グループ作品としてまとめさせる指導をどのようにしているか。（千葉）

特に最初のうちは「表わしたいこと」自体がはっきりつかめないのであるから、ディスカッションをすることにより問題が深められ確かめられて、自分の表わしたいことも明確にされていく場合が多いようだ。動いては確かめ話しあって、びったりした動きをさぐりださせるようにしている。個人は、グループで決められた約束の中で、自分なりの気持ちをこめて動けばよい。

＜第2日＞（研究討議を中心に）

問題1 「テーマの追求」について

- (1) 個人、あるいはグループの気持ちを大切に、
といいながら動きは皆同じ傾向にあるのはなぜか。
- (2) グループにより動きにもっと変化や個性があってもよいと思うが、テーマの追求のためにかえて自由が束縛されるのではないか。

（大阪）

素材あるいはテーマに対して最初はいろいろな動きをだすが（例えば「漁夫」に対して舟、波、岩、魚など）、表わしたいことは何かということをもとに深めさせると、一番気持ちのこめやすい動きを残してびたりしない動きは順番にカットしていく。すなわち残った動きは「テーマ」が焦点化されたものである。そして更にその動きは、テーマをよりよく表わそうと追求す

る中で洗練され自分たちの気持ちにぴったりしたものになっていく。指導者がそういう動きを与えたのではなくあくまでも生徒がつくりだしたものであるから、追求された結果精選された動き（すがた）であると判断している。

たしかに同じような傾向の動きが多いが、他をまねたわけではなく、よくみればリズムも動き方も違っているし、この段階でこういう素材（テーマ）を扱えば、こういう表わし方をするのが一般的である、ということがいえるのかもしれない。（岐阜）

- (3) 問題解決式な感じで体育としてのねうちがうすいように思う。（大阪）

大切なのは動きの変化のつけ方などを覚えることではなく、表わしたいことが最もよく表わせるような方法を見つけだし創りだしていくことにねうちがあるのだから、その過程においてそういう活動がじゅうぶんなされ、そのことを通してからだづくりがなされたかどうかで、体育としての、また表現としてのねうちが判断されなければならないと思う。そういうことを考慮し「つくる」という本質をふまえながら、たえず動くことに追いこむ方法として考えたのが「テーマの追求」である。（岐阜）

問題2 動きの指導について

- (1) 「表わしたいこと」を大切にしなければならないことはよくわかるが、技能指導をどこでどんなふうにおさえるか。（東京、福井）
- (2) 変化のある表わし方ができるためには、そういった動きの指導をどこかでやるべきである。（大阪）
- (3) 多面的な表現ができるようにするためには短時間でいろいろなことをわからせなければならぬがそれをどんな形でおこなうか。
- いつどのくらい、どんな形でとり入れたらよいとか具体的なことはわからないが、とにかく動

きの指導をとりいれるべきだ。

- 毎時間動きの練習をとっているが動きをみつけさせる方法としてよいと思う。（東京）
- 与えるテーマ（素材）の本質的な表わし方はあるはずで、やはりそれは動きで教えた方がよい。（大阪）
- 生徒がそれを使うか使わないかは別としてやはり文化財としてあるものを教えなければならない。
- 動きの指導をするのがいけないというのはないが、1年生においてはこれだけの動きができればよい、という一般性を表現においてはその特質から求めにくいということ、また本質からすれば、ある動きを教えておいてそれを利用させるという方法は好ましくないという理由から従来行なっていたような身体練習は無意味だと思っている。

また途中で行なう動きの指導にしても、現在行なわれているような内容や方法が必ずしもよいとは思われない。なぜなら「こういうすがたになればよい」というのはっきりしためどが、各段階別に明確にされない限り、それに結びつく効果的な指導も明確にはできないはずだからである。

いつ、どこで、何をおさえるべきかを明確にするためには、まずどういう発展をするかという「すがた」を把握、その発展に即した技能内容をみつけなければならない。私たちが「テーマの追求」を軸にして表現を発展させることを考えたのは、生徒のテーマに対する深まり（発展）を把握することにより、表現様相の発展をとらえることができると考え、そうすれば発展段階に即した技能内容も把握できると考えたからである。また表現での「動き」は、内面的なものと外面的なものとが一体化したものであって、評価する場合外面的なものだけでそれを評価することはできない。したがって、場所のつ

かい方や動きに変化がないという観点だけで、作品の 良い 悪い を判断するのは おかしい と思う。
(岐阜)

問題3 テーマの選び方について

- (1) テーマは与えるべきか自由に選ばせるべきか。
- (2) どんなテーマを与えたらよいか。
- (3) 岐阜の場合、「苦しみ」とか「悩み」とかの人生の暗い面ばかりのような気がするが、もう少し夢のあるものも選ばせてはどうか。

発達段階的といって1年生では素材を与え、2年生ではテーマを与え、3年生では自由に選ばせるという方法をとっている。

テーマを選ばせる条件としては、「集団でつくるのに適するもの」「そのことに対して自分の考えがはっきりもてるもの」の2つを基本条件にしている。

またテーマを選ぶ場合は、生徒の生活にねざしたものを選ぶことが望ましいと思っている。なぜなら、追求しようとする興味を失わないし、そのことを深く追求することにより自己をも深く追求することになるからである。発達段階からいってもそういう時期にあると思われる。「苦しみ」をとりあげたからといって生徒の動きそのものは決して暗いことはなく力強い感じがする。苦しみを知ろうとし、そのことに立ち向う姿勢はよいと思うし、そのことばかりを追求しようとしても生徒がそれを望むなら、別にかまわないと思っている。

<講師講評>

「表現」においては、自分の思うことを動きで表わす。すなわち自己表現ができることがねらいであるが、指導においては、小中高で学んだことを基盤にして将来どんな分野にでも進むことの可能な人間にしておくことに重点をおきたい。

だから豊かな経験をもたせることが大切で、一般的でよいから広い分野に目を向けさせ、経験を多くつませることにより教養を豊かにしておくことが大切である。やりたいことの中がせまいのを広げてやるのも教育である。

したがって中学校においては、発達段階からいっても一つのことを深く掘りさげるより、浅くてもよいから短時間でつくれるものを選び、一回でも多く経験させることがのぞましい。

また指導においては、内面的なものの追求と、からだで表現するという動きの追求との両面をとらえて追求していかねばならない。内面を大切にしながら、これをからだの動きで表わす手法で、低次なら低次なりに指導する方法があるはずである。それをみんなで考えていかなければならない。

その点では岐阜の研究は私たちに新鮮な空気を与えてくれたと思う。ともすると、女性は伝統的なわくの中でものごとを考えがちであるが、岐阜のように、根本から考えなおそうという姿勢で、理性的に研究を進められたことについては大いに学ばなければならないと思う。

ただ、内面的なものから表現を追求する場合、動きの指導が問題になる。今後、その面について系統だててもらえれば、と思っている。

柔 道 (格技)

講 師 江藤恵治 (文部省)

助言者 福田 佑 (落合中長)

高橋邦朗 (岐阜大学)

発表者 藤井 実 (厚八中)

授業者 林 万寿夫 (伊奈波中)

研究員

前田 肇 (日枝中) 野田光彦 (笠松中)

清水 彦雄 (岩野田中) 寺松 勝 (加納中)

尾内三千男 (那加中)

問題1 指導過程について岐阜県の場合は、初歩の段階では約束練習を中心にしているが打込み練習は必要がないのか。(千葉)

＜ま と め＞

打込み練習には形やリズムを練習する面と、柔道の持つ要素、例えばチャンス・くずし・体さばき等を練習する面と、その他体力の補強のためパワーを養う面とが考えられる。これらの種々の面はそれぞれ別々にあるものでなく柔道の技そのものの中に含まれるものであるので、初歩の段階ほど別々に練習することは柔道全体を一つのまとまりとしてとらえる事が複雑になると考えられる。

従って形やリズムは技能の上達に従って順次うまくなっていくものであり、はじめからおしえる事は意味がないと思われる。又チャンス・くずし・体さばきなども技を発展させる場合には特別に切りはなして考えさせる必要はなく、全体練習の中で順次発展を追いながら意識の発展と関連させて技能の発展を考えたならば、より効果的であろうと考える。補強のためのパワーを養うことに重点をおく打込み練習は「うまくなる」段階から「強くなる」段階に進む一つの方法であり、初歩の段階でお互いに技をかけたりかけられたりする中で技能を習得する場合には、このことは必要でなくむしろ力が先に立つと技能を習得する上にマイナスになる面がでてくるとと思われる。

要するにこの練習をつづけても、その限られた事態に対してのみ運動技術ができあがるだけで、自由な攻防練習になるとそれが生かされない。だから初歩の段階ほどこのことは言える訳で、ある段階まで技能が発展すればこの練習をとり入れた方がよい場面がありそうである。

問題2 安全面について

イ、全体練習からはいる場合、安全性はどのように考えているか。(大阪・千葉)

ロ、腹筋、頸などの補強運動は安全性と関連させておこなうべきだと思うが如何(千葉・福岡)
ハ、安全性と畳の厚さ・広さについて(大阪)

＜ま と め＞

中学1年という身体的発達的面から考えて柔道初期の段階では筋力の発達も十分でない時期であるので(お互いに相手の隙をみつけての練習の中で)「受け」は技をかけられたらとにかく無理にこらえないで受け身をし「取り」はしっかり投げようと努力する事で同体我倒れたりする事もなく、その上受け身の実際の勘を身につける事にもなり安全性が非常に保たれる結果となる、特に程度の高い投げ方はこの時期にはあまりみられないのでゆるやかな低い投げからはじまり受け身もそれに応じた受け身から徐々に高度に発展できると思う。しかし受け身の指導なしで最初から全体練習にはいる事は危険であるので、岐阜県の場合は最初の2時間は基本動作として受け身の練習をしている。したがってこの進め方でいけば、特殊な生徒をのぞいて腹筋・頸などの補強運動は特別に必要でないと思われる。

畳は体育館などに敷く場合が多いが、この場合一枚敷きにすると痛いという感じが強く練習効果もあがらず、そのため楽に投げられる事ができないため、危険性も考えられるので畳の下に「わら」か古い畳を引くかする配慮が必要であろう。又使用可能な畳を二枚重ねることをするより、一枚敷きで場所を広げた方が効果がある。その場合生徒が痛がらないよう配慮してやる事は勿論である。又真四角に敷くより、やや短形の方が練習する場合に畳のあそびが少なくなって練習場所が実質的に広がる。

問題3 「全体と部分」ということを柔道の場合どうとらえているのか(福岡・大阪)

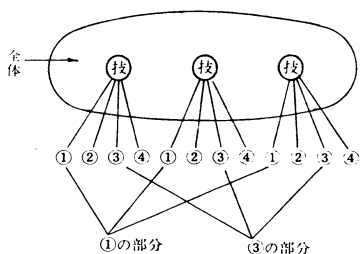
＜ま と め＞

柔道そのものが発展していく姿は一つの技が完成した後でないと次の技がでてこないものでなく種々の技が「できない」姿から順次発展し「それらしくでき」「まとまってできる」ようになってくるのであるから、その各時点においての姿そのものを全体として把握しなければならない。

即ち1年の段階での「チャンスを見つけて技をかけている姿」。2年の段階での「チャンスにくずして技をかけている姿」を全体として把握するわけである。従って全体は少しずつ高度なものに発展していき全体を練習する場合には、その姿に到達するような練習、即ち約束練習や自由練習を発展の段階をふまえながらおこなわせることが大切になるのである。

部分とは柔道の個々の技をいうのではなくどの技にも共通する技の構成要素（チャンス・くずし・体さばき等）を部分と考えている。従ってこの部分は勿論特別にとり出さなくても全体の中に包括されるものであるため、全体の発展の中で順次部分の発展もあるはずである。しかしある段階にきた（まとまった技がでかけた段階）時に部分を取り出してその習熟につとめた方がより効果がある場合には、その練習をさせる必要がある。その事によってよりうまくなる段階に早く到達できるものと考えている。

部分と全体を図に示せば次のようである。



問題4 約束練習・自由練習の内容をどうとらえるのか (千葉・大阪)

<ま と め>

約束の仕方には①技をきめて②取りと受けを③

動きを④技に対しての応じ方を、などが考えられるが、岐阜県では④を中心にした考え方に立っている。すなわち技の面からいえば、習得技についてはほとんど約束しないで、特に「チャンス」にうまく技に入った場合には「受」は無理にこらえないできれいに投げられる。(初期)チャンスに「うまくくずして」技に入ったならば「受」は無理にこらえないできれいに投げられる。(初期の発展)というように応じ方において自分からポイントをはずさない約束をしているのである。自由練習ではそうした約束をしないで、投げたり投げられたりする攻防練習をすることを言っている。又厳密に言えばかかり練習・約束練習・自由練習の区別をはっきり区切ることはむずかしいが一応練習形態を区別する意味から上述のように分けてみたわけである。

問題5 研究方法について各型の実証の仕方は、学校別にしたのか又はクラス別なのか。
(指導者について) (和歌山)

<ま と め>

研究方法については1年では四つそれぞれ違った指導過程を導き、2年、3年ではその中の効果的な指導過程2つを取り出して実験をした。その仕方は、4つの過程を同じ指導者で岐阜市で2校高山市で4校を実験に使い同じ方法でおこなった。

その結果は技を分けて指導することは効果的でなく又部分的なものを入れて指導することより全体練習(約束—自由の練習)を通して指導することの方が効果的であった。(初歩の段階)

問題6 三つの技の統合的指導について

技を示範し指導する場合、まとめて示範し指導すると一つの技に片よる傾向がみられると思うがその時の指導はどのようにするのか。 (千葉・福岡)

＜ま と め＞

技を統合して指導するといっても同じポイントをつかめる技、例えば支えつり込み足と膝車というようなものは統合して指導するようにしている。この場合体さばきの全く違った技があった場合に生徒は技をかけやすいものに片よる傾向がみられるので、そのむずかしい困難をとりあげて理解させながら約束練習の中で意識的に多くその技をかけさせるよう指導している。従ってその技をとり出して打込み練習を特別におこなわせるということはこの段階ではない。技によっては場所の広さにも関連して技がだしにくい点もあるので練習人員を考えたり、場所的な面の考慮もする必要があると思う。

問題 7 (イ) 約束練習が多いと柔道の特性である瞬発力を最大に出させたり、最大限の力を十二分に出させる場面が少ないように思われるがその必要性はどう考えているか。(大阪)

(ロ) 約束練習が多いと運動量が少なすぎはしないか。(静岡)

＜ま と め＞

(イ) 中学生が約束練習や自由練習をおこなう場合には、一般の柔道試合のような力強い瞬発力や最大限の力を十二分に出す場面は見ている側にはあまり感じられないけれども、生徒は生徒なりに適当な瞬発力や最大限の力を出す場面がでてはらずで、よく動き、チャンスには思い切り早くしかも強く技をかけさせるよう留意して順次指導すればこの面は充分満たされると思われる。

(ロ) 生徒の体力に応じた運動量があればよいのである。岐阜県の場合二交代制でおこなわせているのでこの交代がなければ問題はないが、現在のままでも約束練習の時の技をかけようとする時に

は十分に力を使っているし、自由練習の中でもお互いに相当動きのはげしい練習になり練習量は何とかあるのではないかと思われる(1人の練習時間(投げ技のみの)13分)

問題 8 練習時に体格の大きい生徒と小さい生徒とたまにやらせてはどうか、そうすれば小さい生徒が大きい生徒を投げたという柔道のよさも味わえると思うが(岐阜)

＜ま と め＞

グループに分ける場合、身長で分けるよりも体重を基準にして体力体格を加味して分けるべきだろう。中学時代は技能習得の時期であり、筋力持久力は中学でも高学年～高校にかけて非常に発達してくると思うので、まず技能を身につけさせるべきだろう。そしてある段階まできた時には「大小自由」におこなうことは効果があると思われるが、個人差のいちぢるしい中学時代で、しかも柔道初歩の段階においては割合に個人差のない者同士の練習が効果的であると考えられる。

問題 9 連絡変化技について

どの段階でとり入れるべきなのか。

(指導について)

(岐阜)

＜ま と め＞

現段階においては、やはりある程度技がわかりチャンス・くずしとかけ・体さばきがそれぞれ関連してわかってきた頃に連絡変化技として指導することが効果があると思われる。



高等学校の部

器械運動 (腕立前転)

講師 坂井田逸治 (東京都指導主事)

助言者 高野 卓哉 (岐阜大学)

発表者 早川 時次 (岐阜高)

援業者 立川 正 (岐阜西工高)

研究員

宮崎美達 (岐阜商高) 川島竜 (岐阜南工高)

国井鋭三 (長良高) 森 正紀 (岐阜東高)

田中 武 (岐阜南高) 村瀬邦子 (岐阜北高)

福島史子 (岐阜第一女高)

問題1 腕立て前転には倒立が大きく関係すると
思われるが、腕立て前転の指導において倒立
との関連をどう考えているか。 (愛知)

<まとめ>

発表者からは今回の研究では倒立との関連を
特に考えず、発展の様相に応ずる指導内容を修
得するために効果的方法であれば考えるという
立場で進めてきた。講師からは安全度の低い初
心者には感覚を修得するための導入として当然
の着意と思うという助言があった。

問題2 最初の様相「うかずにころがる」の段階
においてはただ回数多く行なわせるだけでな
く、その間に何か適当な方法はないものか、
現場で一番問題になるA、B班の指導方法は
具体性に乏しいと思われるが、指導の要点は
何か。 (新潟)

<まとめ>

A班 (うかずにころがる) については最小
限、腕立て前転の調子を覚えさせることが中心
になるので、転回そのものを何回も行なうこと
によって全体の感覚をつけさせることが必要に
なる。留意点としては恐怖心や転倒時の苦痛を
なくするようマットの枚数、質を考慮し、補助
者をつけて行なわせることが肝要である。

B班 (うかずにしりから落ちる) は頭をおこ
し、背をのばして転回させることが重点で、全
習の場合は補助者をつけて行ない、分習では台
上から重点に留意してそれを体得するよう補助
者をつけて繰り返し転回させるようにすること
である。

問題3 この指導案では技能の発達で区切
られているがいくつに区切ったのか。

(講師)

<まとめ>

5つの様相でとらえた。しかし研究授業では
「ういて美しく立つ」段階のものか1名なので
「ういてかるく立つ」の段階の生徒と一緒にし
て4班編成にした。様相を細分しすぎると指導
内容など区別すること等指導上困難をきたす
という点も考慮した。

<全体のまとめ>

(講師)

1 発表の趣旨は8mm映画でよく理解でき、一
応この指導で成功したと言える。なお、腕立
て前転の指導でそれぞれの段階に指導上の焦

点を明確にした点は非常によかった。

- 2 導入の段階で「全体の調子をつかませる」ということは技能習得のうえから大事なことであって、この全体の調子をつかませるところに着目した点はよい。
- 3 発表者から「部分練習は初歩の段階では余り有効でない云々」といわれたが、これについては今後さらに研究する必要がある。
- 4 興味の点でアンケートによると「マットは嫌い」が多いが、なぜ好きにならなかったのかについての究明不足である。マット運動はいろいろの要素がたくさんあるので、それらをじゅぶん考察して「動機づけ」などを考えることが必要である。
- 5 この指導法の問題点の1つとして、器械運動で一番大切な安全に指導する着意が欠けていることである。これは技能の上達を強調するあまりではないかと思う。
- 6 指導に際しては運動の力学的要素を教えることが必要である。例へばなぜ回転がおこなわれるのか、そのためには足の振りあげや手のつき方などをどうしたらよいかというように。
- 7 様相のうえに立って段階的、あるいは漸進的な指導を考えたのはよいが、ただこれらの指導で指導の重点がはっきり表われていなかったのはおしい。
- 8 この研究では「技能の向上」のみをとり扱っているが、この考え方だけでよいかどうか疑問の余地がある。技能と体力とはからみあっているものだから、この二つを常に考へ入れて指導することが重要である。すなわち、倒立は体力を高めるのに役立ち、前方ブリッジは柔軟性を高めるので、このような単純な基礎能力を鍛錬することも大切である。

陸 上 競 技

講 師 浅川正一（東京教育大学）

助言者 田中 猛（岐阜県指導主事）

発表者 松永武彦（大垣工高）

授業者 浅野三郎（大垣商高）

研究員

森 力雄（大垣一女高） 三輪 基（大垣北高）

丹羽悟郎（大垣工高） 久保田勝巍（不破高）

早瀬京二（海津高） 泓 賢良（大垣高）

大杉 正（海津高） 佐々木篤司（大垣工高）

扇本尚三（大垣工高） 長屋 清（大垣高）

平田峯子（不破高） 森 英夫（大垣工高）

問題1 走巾とびの教材を取り扱っていると、一番気が付くのは学習者が踏切りにまよっていることである、利き足の指導について力学的な方向からお話頂けたら。

（大阪府 大手前高 伏見）

<ま と め>

高校では大部分利き足は決っている。小、中の最初の段階では数げいこで決って来ると思えます。将来陸上の選手を目指す場合は利き足を左足にしておいた方がよいと思われます。

又、走り高とびについては左足踏切の生徒は右から、右足踏切の生徒は左から、助走の角度を決め距離を規定してやると自然に正面とびのフオームは決ってくると思います（発表者）

問題2 踏切足と利き足との関係について。

（大阪府 大手前高 伏見）

<ま と め>

（1）踏切足は利き足の方がよいのかどうか研究をしていないので解答できない。（発表者）

(2) 利き足については実際の場合、左足の者が多い。しかし多いからよいというわけではない。利き足の決定はやはり生活習慣によると思う。子供は親の指導でどうにでもなるものではないか。(例えば箸の持ち方など)

(3) 跳躍の場合左足の方が強い力を出しているようである。また利き足で踏切をした方が強い力を出す。しかしスタートの場合利き足を前に出すものと出さないものがまちまちのようである。(講師)

問題3 様相のとらえ方については賛成だが、小、中については3歩ハードルのみを指導しないで、左右両方どちらでも(2、3、4歩インターバル)指導した方がよいのではないか、ローハードルの場合では一定の段階でとべるが、ミドル、ハイ、ジュニアになるとスムーズさがなくなるのではないか、その点岐阜県提案に対して質問します。

(石川県教委 村田)

<まとめ>

(1) 将来はジュニア、ハイ、ミドルなども授業でとりあげるようになるかも知れないが、本研究では80mハードルの授業と規定して研究を進めて来たのでご質問の点については考慮していない。結局小、中、高と段階的に体力が高まってくれば自然的にリズムも高度さを増してくるのではないか。(発表者)

(2) 体力は技能の発達に従って付いてくるものであるが、その早さを部分練習などでおぎなう。(発表者)

<講評>

(1) 素晴らしい発表で一般の先生も質問がないのだろうと思うが、総てがその通りだと言えないところもあろう、陸上競技の指導として

は新しい考え方で結構であったと思います。

(2) P266の助走の問題について

15m助走と20m助走の場合、15mの時はスピードがあったが距離が少ない、また20mの時助走スピードが低いにもかかわらず記録がよいという点について、15mと20mの比較で20m助走の方がスピードが付かないのが不思議だ、高校の場合最高スピードは30m~40mである、結局最高スピードでとべない何か(踏切準備、その他)があるのではないか。

スピードだけに重点を置いて考えると問題が生じてくる、というのは脚力、筋力がどうであるかということが考えられるからである。スピードが速い方がよいとは言えないので、スピードと脚力の点を考えてバランスを取って指導するとよいと思います。

(3) 15m助走の場合生徒は助走スピードを付けるために頑張ると踏切の準備と脚力がスピードに負けるのではないかと思います。だからこの点には注意を要すると思う。

(4) ハードルの場合もこのような研究は今までになかったのですが(ユニバーサルカウンタについて)A型とB型の指導で、A型指導の方がよい結果が生れるということはわかるが、高校の場合スピードがついてくるので安全という面から問題がある、というのは抜き足などの点で是非指導しておくべき所があるのではないかと思う。

その他は大変正確な資料のもとに研究されよかったと思う。

(5) グループ学習について体育の本質的な学習方法であると言うのは疑問だ。

グループ学習は形態的なものであるから時には班別、能力別学習もとり入れるべきだ、だから教材により、技能の程度によって学習形態を考えるべきだと思います。(講師)

サ ッ カ ー

講 師 井上一男（文部省）

助言者 大淵正雄（岐阜大）

発表者 市川忠男（岐阜高）

授業者 富井聖文（岐阜北高）

研究員

辻十一郎（可児工高） 広瀬正己（岐阜東高）

佐藤有三（加納高） 伏屋仁司（大垣工高）

中沢鉄州（岐阜工高） 松原郁夫（加納高）

小竹治義（大垣北高） 石川武文（大垣工高）

問題1 本で行なわれた授業について

ゲームはルールによって成立し、正しいルールを理解することによって発展すると考えます。審判の技術に多少の問題がありました。が、ルールのとり扱いについてはどのようにしていますか。

（福島県 会津工高 栗本孝夫）

<ま と め>

ルールについては導入の段階で簡単に指導し、又ゲームの中でおさえていたがまだ自信をもって笛が吹けなかった、ゲームが高度になっていくに従って修正していくつもりである。

（授業者）

問題2 (1) P264の学習内容の時間配当について、指導計画展開のところでこれだけ多くの内容ができるか否か。

(2) 球技におけるゲームの評価をどのようにしたらよいか。

（愛知県 旭ヶ丘高 浅井溢夫）

<ま と め>

(1) P264～P265、たてに広がる段階で学習内

が多すぎることにについては全部展開の中でとり出さず準備運動の段階で、スローイング、ショルダーチャージを指導する。したがってここでは3対1、インステップキック、うき球の処理を重点的に行うので充分できると考える。

(2) ゲームの評価はなかなかむづかしい、一般的には個人技能の評価で行なっている。しかし、これがゲームの評価にはならないので、ある集団技能を取り上げてそれを上、中、下の段階に分けグループがそれをできるか、によって評価したらよいと思われるがこれらについては今後充分に研究していく必要があるであろう。（講師）

問題3 (1) 発表された先生に対して

評価はどのようにしていられるか。

(2) 文部省の配当時間によれば学年12時間であるが、雨天時、導入、整理などで9時間ぐらいしかできないので技能の向上があまり望めないのではないか、私の学校では1年でサッカーをまとめて20時間やっているがこのようにしたらどうか。

（愛知県 旭ヶ丘高 浅井溢夫）

<ま と め>

(1) 技能の評価のみに限って答えると、その観点としては、リズム、タイミング、集中力、バランス、リラクゼーションについては、ゲームその他の中で評価しさらに加えて正確さ、強さ、速さと総合的に評価する。

（発表者）

(2) 技能修得、体力の向上をバランスをとりながら指導しなくてはならない。したがってある特定の種目を学年にかためて行なうことはこの点からいってもよくないであろう。学校の実情によって文部省の方法を基本にして指

導効果をあげてほしい。

(講師)

問題4 (1) 我々体育人として現在一番遅れているのは評価であると考え。専門以外の者が技能評価をする場合客観的にはできないのであろうか。

(2) 学年のゲーム内容(技能内容)に応じてルールを作成していく必要があるのではなからうか。

(3) サッカーは自然に発生した文化財である、バスケットボールと比較するとその発生の根源には違いがある、それを考慮して研究を進めてほしい。

(大阪府 大手前高 伏見)

<まとめ>

(1) 先に述べた技能評価をしながらスキルテストを別に取り出して行なわずゲームの中で本質をわきまえた動きを1人1人時間をかけて総合的に評価する。

(発表者)

司会者 定められた時間も経過したので伏見先生の質問を考慮のうえで講師の井上先生にサッカーの発表に対すを講評をお願いします。

<まとめ>

スポーツの発生には種々のものがある。古代においては我々の生活の中から生れたもの、現在の社会に適應するように作られた近代のスポーツ、それぞれのスポーツには特性がある、その特性を生かす効果的な指導を行なわねばならないであろう。

評価については現在球技において充分なものはないが、観察によってある程度できるのではないだろうか、記録がでるだけが評価ではない、しかし我々にとって球技の評価を今後研究していく必要がある。

本日のサッカーの授業を見れば理解できると

思うがその授業内容はかなり程度が高い、サッカーの研究もそれをうらづけるようによく研究されていたと思われる、今後さらに掘り下げて研究をしていただきたい。

(講師)

剣 道

講 師 三橋秀三(岐阜大学)

助言者 杉江 律(同上)

発表者 村瀬隆平(八百津高)

授業者 大杉二郎(岐山高)

研究員

多々羅 弘(加茂高) 日比野修一(可児工高)

坂田 実(関高) 坂井 康彦(八百津高)

問題1 実験の結果(表Ⅲ)によるとA型(様相に基づいた指導)とB型(部分より全体)では、打突部位の取得本数に相当の差が生じているが、その原因についてどう考えているか

(愛知)

<こたえ>

最も大きい原因は、防具をつけての稽古量の差だと考えている。従って初めから防具をつけて学習するA型にくらべて、基本動作、応用動作の学習の後、防具をつけての稽古にはいるB型の学習では、取得本数も少なくなるのだと思う。

問題2 様相のとらえ方について、接近したら離れないという様相は、もっと後の高度の段階で生ずるものではないか。

(愛知)

<こたえ>

この段階でいっている「接近したら離れない」という様相は、後に出てくる意図的な要素のはいったつばぜり合いではなく、打ち合っ

接近したら離れることができないという単純な姿のことである。

問題3 打つだけ、受けるだけという様相について、もう少し明確に説明してほしい（愛知）

＜こたえ＞

受けると打つとの連繋動作ができなくて、それぞれが別々にしかできない時を示す。

問題4 A型、B型の比較において、生徒の学習意欲の点ではA型がまさるということはどうなずけるが、正しい姿勢や動作の修得という面からは果してどうだろうか。（愛知）

＜こたえ＞

正しい姿勢や動作で行なえるということを考えて指導することは大切なことである。

過去3年間のわれわれの研究では、初歩の段階から防具をつけ、実際に打ち合わせる中でそれらを指導した方が、今までの指導方法（初歩の段階で基礎動作の練習を十分行なって、その後稽古にはいる）よりも、より効果的だという結果が出た。すなわち、その後の稽古や試合の場において、より正しい姿勢、動作で行なえたわけである。

問題5 剣道には国際性が乏しく、そうした面からの意欲的な学習というのはむずかしいと思うがどうか。（大阪）

＜こたえ＞

一般的には、文化、スポーツは、それぞれの長所を取り入れ、交流し合うことによって発展するものではあるが、剣道のようにわれわれ民族が作り上げてきた文化遺産の独自性を大切にすることも意味のあることだと思う。

＜講 評＞

基本動作から応用へという、長い間続けられてきた指導過程に対する考え方を打破し、新しい観点に立って研究を進められた勇気を賞賛すると共に、この研究が、新しい指導資料として今後、大いに役立つものと思う。

総 評

文部省 井上教科調査官

2日間にわたる発表については、いろいろと問題点はあるが、小、中、高を通して一貫した研究指導がなされたことは、今までと違い非常に意義深いものがあると思う。またこれだけの研究ができたのは、岐大の先生方を中心にした研究組織が確立されていたからだろうと考える。

様相とか、全体と部分など新しい用語が作り出され、一般的に理解しにくかったと思うので、もう少し用語についての説明もしてほしかったと思うが、しかし、今までの基礎技能の分析が中心であった技能指導の研究から脱皮し、子どもの活動の現れ方（発展の様相）を軸にこの問題を考えたのはよい着想であった。従って学習内容や学習活動をどのようにおさえていくかという点で、岐阜県は新しい方向を打ち出したことになるわけである。しかし具体的に、どこで、どんな内容をどの程度にということになると不明確な点も多いので今後の研究に期待したい。

いずれにしても、今回の研究によって従来の指導の欠陥が反省できたわけであり、全体提案などでもっと強調するとよかったと思う。この現場指導に密着した、極めて高度な価値ある研究を、さらに掘り下げ、一層の効果を上げていただきたい。

昭和41年度 評 議 員 会

期 日 昭和41年11月17日

場 所 岐阜市高間ホテル

出席者

武藤 清三（石川）、多田 良男（熊本）代理
小原義夫（高知）代理、松山六郎（福岡）代理
平松 輝夫（宮崎）、平石 亮三（大阪）
藤原 明（大阪）、中川 時三（大阪）代理
土江 幸弘（島根）、島田 良吉（千葉）代理
広橋 義一（千葉）代理、名倉 幸雄（高知）
上田 敬次（群馬）、田中 亨（東京）
鈴木卯之吉（東京）、中島 花（東京）
鈴木 正三（東京）、坂井田逸治（東京）
中村 十成（東京）、野沢 要助（東京）

評議員会次第

1. 開 会 の 挨 拶 （野沢要助）
2. 報 告 事 項 （鈴木正三）
 - イ）昭和41年度事業概況報告
 - ロ）昭和40年度会計報告（審議承認事項）
3. 審 議 事 項 （鈴木正三）
 - イ）昭和42年度事業計画案
 - ロ）昭和42年度予算案
4. 閉 会 挨 拶 （野沢要助）

議 事 録

1. 野沢常務理事会長に代りあいさつ

議事に入る

2. 報 告 事 項（鈴木）

イ）昭和41年度概況ならびに事業報告

別紙プリントに依り説明

特に機関紙学校体育研究（4号迄発行）について詳しく説明した。

この機関紙を発行した目的は組織の拡充と、会員の研究業績を発表し記録に残すためである。

育英図書の中村十成氏の協力（幹事として依頼）により編集発行できているもので鈴木常務理事担当である。

今後会員各位の援助協力を強く要望するものである。

この機関紙は4号迄無料配布しているものであるが、今後は支部即ち各員研究会の責任数を本日の評議員会で審議決定していただきたいと考えている。

ロ）昭和40年度会計決算（鈴木）

別紙プリントに依り説明承認された。

3. 審 議 事 項（鈴木）

イ）昭和42年度事業計画案

a）別紙プリントに依り説明し審議した。

講習会の日時については質問ならびに要望があり、3月実施を再検討することとなり、常務理事会に委託された。

常務理事会では各県支部の要望を考え近く要項を作成発送することとなった。

b）研究大会ならびに優良校表彰式

明年度第6回全国学校体育研究大会を大阪府で開催する事を満場一致可決し、開催員を代表して平石氏のあいさつがあった。

優良校表彰式を研究大会と平行して実施することも併せて可決した。但し研究大会ならびに優良校表彰式の期日については後日開催地を打合せ決定することとした。

c）昭和43年度は福島県会津若松市、

昭和44年度は高知県で開催することを審議で決定した。

d）機関紙発行について

報告事項で承認された機関紙「学校体育研究」を今後も継続発行することを可決するとともに、購読料について審議し次の通り決定し、明年度（41年12月）より施行することとなった。

・各県支部責任購読数年間 50組。

1組は6冊とする（機関紙は隔月発行する）

・会員に限り1組年間1,000円とする。

但し個人（会員でない個人）1部200円、年6部で1,200円とする。

・送料は購読者支出とする。

・従って各県支部は最低50組、5万円を納入し購読することとなった。

ロ）昭和42年度予算案について

別紙プリントについて説明、承認された。

4. 役員の件

イ）理事長の更迭

尾崎理事長の辞任を承認、新理事長の推薦方について事務局提案審議の結果、野沢要助氏を理事長に満場一致推薦した。

野沢新理事長あいさつ、学校体育の現場を統轄する唯一のこの連合会を愈々発展させたい。即ち、組織を拡充し早急に46都道府県が全部加盟するところまで努力したい。と決意を披瀝された。

ロ）会長辞任の件

東会長よりかねがね辞意がもらされておったが、

これを認め、改選期に検討することとした。

5. その他

国庫補助金について。

現在文部省より研究大会共催の名目で15万円の補助金が支出されているが、女子体育連盟でも相当数の補助金を得て運営している。

我々の団体では他にみられない機関紙（研究雑誌）を発行しているので、これ一つだけでも補助対象となろう。発行費の一部に充当する経費を支出して貰うなど補助金の増額について努力する必要が認められ、今後関係方面に働きかけることとした。

即ち、a) 機関紙発行（研究雑誌発行）費の請求。

b) 全国の組織団体への国庫補助金の要望。

このa)、b)に対する事務手続を研究し事務局は国庫補助金かくとくに努力することが要望された。

6. 理事長の閉会挨拶で散会した。 以上

第5回 全国学校体育

研究大会反省会開く

期 日 昭和41年11月25日 6時

場 所 学 習 院

出席者 野沢理事長

鈴木卯之吉 坂井田逸治

鈴木 正三 小碓松次郎 中村 十成

理事長あいさつ

この反省会は岐阜大会を省みて明年実施の決定した大阪大会にそなえ、より良い大会とするためのものである。きたない意見を開陳してほしい。

1. 運営について

1) この大会の性格を確立したいものである。連合会主催一本でゆくことが考えられないか。

文部省より15万円の支出がなされ共催となっているのであるが、経理面から考えるとその必要はないのではないか？

この大会は、研究連合会唯一の重要行事であるからすっきりした形で実施してゆきたい。

講師の選定、テーマの設定など大会運営に影響がある重要事項についてみて今後改善する必要がある。

結局文部省と打合会を近く持って十分討議し結論をみ出すこととした。

2. 大阪大会の方針を打立てよ

(イ) 連合会の分担金を30万円とし内10万円は経常費より支出したい。

他の20万円は機関紙収入をもってこれに充当すること。

(ロ) 講師の選定は連合会が関係方面と話し合って決定すること。

(ハ) 分担金30万円を支出しこの大会に必要な経費例えば講師謝礼、交通費、宿泊費、本部役員交通費、宿泊費などはすべて大阪大会実行委員会の支出とすること。即ち経費支出の一本化を図る。

(ニ) 大会の期間

大会は（金土）2日間とし優良校表彰式をこの期間中開会式時に行なう。

(ホ) 大阪大会準備委員会を設けること。

平常業務と切離し、この大阪大会準備のため特別の委員会を作り、これが窓口となって関係方面とせしようにあたる。即ち、

・期日の決定、要項の決定、具体的には。講師の選定。テーマの選定。分科会の選定。運営方針（開閉会式ならびに優良校）表彰式次第などならびに役員の役割の決定

・大阪大会並に福島大会の構想、期日など（出来れば要項の概要）を決め、公表できるよう準備することなど。

3. その他

(イ) 宿舎について

・一般会員の宿舎と、本部ならびに講師宿舎を別に設ける。

・一般会員の宿舎は一定の人員にしばらく他は各個人の責任で宿泊するようにする。

(ロ) 受付について

・予約会員は県別とし各県一括して受付ける。従って開会式会場を県別に用意する。（予約者のみ）

・当日受付 県別、小、中、高別に設ける。

・会場地受付 小、中、高別に設ける。

(ハ) 紀要不足について

原因を検討し次回大会はこのようなことのないよう努力する。

・作成部数の決定で一番困難なのは推定数の決定であるから、慎重に推定すること。予測

(ニ) 大会中の諸行事について

評議員会、祝賀会などの行事を検討してゆきたい

・評議員会は前日を予定すること。

・祝賀会は会費をあらかじめ徴収すること。更にやらないことも考えてはどうか？

(ホ) 優良校表彰式について

・開会式時に実施すること。

・表彰状筒を用意すること。

・楯、記念楯を研究しふさわしいものにすること。

(ハ) 本部役員は講師を兼ねない方針で実施すること。

以上

日本学校体育研究連合会推薦



本格派のバスケットシューズ

<ゴールド>

23cm迄 ￥ 900
24cm以上 ￥ 950

<新発売>

<デラックス>

23cm迄 ￥ 1,400
24cm以上 ￥ 1,450



<シルバー>

23cm迄 ￥ 800
24cm以上 ￥ 850

トヨーハイテクシューズ



東洋ゴム工業株式会社

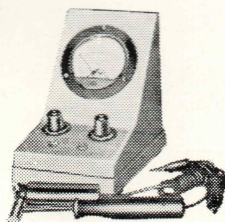
大阪西区江戸堀上通り2の5 (TEL) 441-8801
トヨーパトラ・トヨーウレタンアップ・トヨーLPシューズ



自律神経・診断・治療器

ノイロメーター

反応良導点(治療点)の電気導入法は極めて効果の高い治療法です。



スポーツ医学に利用され、世界一流の選手達
に使用され大変喜ばれております。
筋肉痛・ネンザ・打撲傷その他スポーツによ
る疾患にすばやいききめをあらわします。

ノイロメーターL-C型
携待用普及スタイル

(相談下されば専門の病・医院を紹介致します。)

良導絡研究所東京事業所

東京都中央区日本橋本町4の13
電話 (241) 1031

日本学校体育研究連合会推薦
 全国高等学校体育連盟体操専門部推薦

700
 COLOUR
 SIZE
 FORM
 QUALITY



スポーツマンが折り紙をつけた トレーニングウェアの最高級品

ニチレ[®] トレーニングシャツ
 トレーニングパンツ

ジム スター | ジム エース



ケイ・イ・オン

日本レイヨン

ニチレ オイロン・エステル